ISSN 0286-1968

河上肇記念会報

No. 20
1985. 7. 1

〒542
大阪市南区島ノ内一―二〇―一九（丸善石油ビル）
千代田商事内　河上肇記念会
電話　（〇六）二五二―三六九六
振替口座　大阪　三一三一九五

記念会のこれまでとこれから

杉原四郎

一九七五年一月十九日、法然院で記念会の総会があった。世話人代表の末川先生をはじめ、羽村静子氏や鈴木洵子ら御遺族、住谷先生、福井先生、天野敬太郎、小泉仁一郎、大門英太郎ら世話人の方々、それに東京の小林直衛氏はじめ門下生や河上を敬慕する人々総計五十五名が出席した。粉雪の舞う日で、本堂で河上肇三十回忌の法要が営まれたが、その読経の間、京の底冷えが身にしみたことを今も覚えている。午後はバスで府立総合資料館に赴き、河上肇文庫を見学、夕方解散した。

記念会の発足はそれより数年まえにさかのぼる。一九六九年設立の「河上肇博士遺品保存委員会」がしあげの仕事として一九七二年に京都で遺品展や講演会を開催することになり、その主催者としてつくられたのが河上肇記念会のそもそものはじまりだった。記念会が府立総合資料館や京大経済学会と共催で開いた行事は成功裡に終り、遺品展図録や講演会記録も翌年出版されたのを機に、記念会自体も会則と組織をととのえて会員を募ることになった。一九七三年十月のことである。そして十一月十八日法然院で七三年度の総会が持たれ、つづいて七四年度の総会がひらかれた。それがはじめにしるした七五年一月の集まりだったのである。

以来十年の歳月が流れた今、会のこれまでをふりかえると、多くの変遷があったことに気づかせられる。当初の二十二人の世話人の約半数は鬼籍に入られ、代表も末川先生から住谷先生にかわり、一九八一年以来私がひきついだ。

事務局は菅原昌人氏がなくなってからもずっと大阪の菅原法律事務所にあったが、一九八〇年に大門氏の千代田商事にうつり、事務局のメンバーも多少の異動があった。だが記念会の会報――第一号が一九七五年十二月に出た――が平均年二回のペースで刊行されてきたこと、全国から数十名の会員が出席して秋に法然院で総会が開かれてきたことはかわらない。そしてこうした会の運営が円滑におこなわれてきたのは、全く大門氏をリーダーとする事務局の方々――現在は大久保雅摂、岡村孝雄、細川元雄の三氏――の御努力のおかげである。

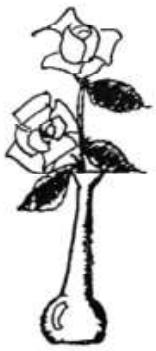
この十年の間に、河上肇に関して二つの大きな事業があった。一つは一九七九年に行われた生誕百年記念事業で、展示会や講演会が一九七二年の時よりも大規模に行われた。もう一つは一九八一年から刊行が開始され、第一期二十六巻が完結して現在第二期に入っている全集で、これも一九六四―六五年に出た十二巻の著作集より質量ともに大きく前進したものである。記念会は東京河上会と協力して生誕百年記念事業の完遂に力を致したし、末川先生の監修、寿岳・天野両先生を顧問とするこの全集は、編集の面でも普及の面でも記念会のメンバーに多くを負うている。してみればわれわれの会は、常に会報の発行と定期総会の開催をつづけてきただけでなく、七〇年代末から八〇年代にかけて見られる河上肇への関心の大きな高まりに対して、直接間接に貢献するところがあったと考えてもよいだろう。

さて記念会のこれからであるが、まず、第二十号を機に、この会報を一段と充実させてゆきたい。末川先生は創刊に当って「河上について関心を有しておられる諸兄姉自身の連絡や対話の場として、また最近若い研究者のあいだで盛りあがってきた河上研究のための資料や手引きを提供する場としても活用されるであろうことを期待」しておられるが、この二つの機能を一層発揮してゆくようつとめたい。当初目指されていた年四回刊の実現はすぐには無理だが、将来の課題であろう。

つぎに、はじめの間は行われていたがそのうちに中絶してしまった講演会や研究会の復活である。先日開かれた世話人会でも話し合われたが、若い世代に対する積極的な働きかけを通じて会員の層をひろめてゆくことが、会の発展をはかるうえに極めて大切であるが、そのためにもこうした行事を何とか軌道にのせたいものである。

東京河上会との統合問題がこれまでよく話題となったが、

両者が特色を生かしつつ連絡をとり合って併存してゆく現在の状態のままでよいと思う。東京と京都は、河上肇の波瀾に富んだ生涯で二つの重要な場所であった。河上にとってもう一つの重要な場所である西南地方に何らかの組織が生れるとなおよいだろう。学会で関東部会、関西部会、西南部会という三つの部会をもつものがよくあるが、河上肇の場合も、こうした三つの組織がローカルな特色を出しながら発展してゆくなら、河上への関心は全国的に一そうひろがり、研究のレベルもさらに向上するのではなかろうか、それが私の夢である。



河上肇記念会会報

No. 1
1975.12

〒530 大阪市北区堂島浜一丁目一九九（堂島ビル）
日本出版販売株式会社内 河上肇記念会
電話（〇六）三六四一六七七一
振替口座 大阪 二一三一九五

会報の創刊に当って

宋川 博

河上肇の人となりを追慕したりその業績を研究したりする集まりは、東京でも関西でもいろいろあるのだが、いわば恒久的に かつ定期的に継続されているものは東京河上会と京都大学の河上会があり、とくに東京河上会では長いあいだ会報を刊行して、時どきの会合の様子や会員の消息だけではなく、河上に関する新しい研究の成果や資料なども掲載されている。そして関西でもこれまで河上の命日を中心に毎年のように会合を催してきていたが、諸般の事情のためにとぼしい機会はできていなかった。ところが、一九七二年六月に京都府立総合資料館で河上肇遺品展が開かれたのを機会に、全国的に河上にゆかりのある各方面の人びとにより河上肇記念会が結成されるに当って、もっとも、この遺品展は、一九六七年に出版された河上肇博士遺品保存委員会によって収集されたものを基礎として開催されたのであり、それが出発点となって河上肇記念会が発足してきたのだというべきであろうが、そのような経緯については、本誌に収められている諸氏の論稿で詳しく述べられているからここでは省略する。

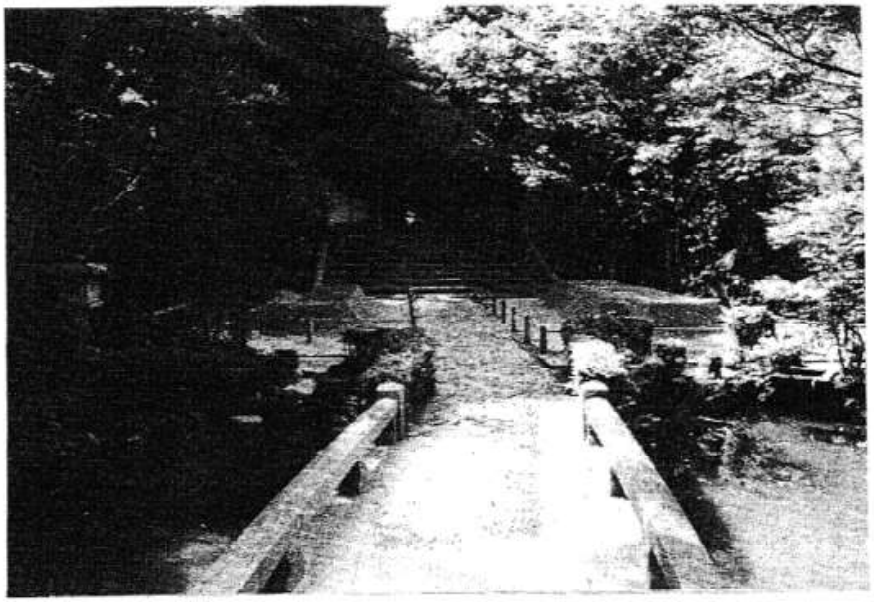
こうして、河上をめぐって東京の河上会と関西の河上肇記念会が併立することになったのであるが、両者は、会員が互いに入り乱れていることによっても明かなように、相互に協力し提携しあっていくいわば兄弟の会であって、こんど発刊することになったこの会報も、東京河上会会報と共に河上について関心を寄せられる諸兄姉自身の連絡や対話の場として、また最近若い研究者のあいだで盛りあがってきた河上研究のための資料や手引きを提供する場としても活用されるであろうことを期待し希望しているのである。

目次

記念会のこれまでとこれから ……杉原 四郎 …… (1)
一九八四年総会特集Ⅱ～会場スピーチ記録 …… (4)
本誌判型の変更と投稿のお願い …… (13)
安井功氏の死を悼む ……大門英太郎 …… (14)
会員通信 …… (16)
世話人会議事摘要 …… (29)
編集後記 …… (29)
河上肇記念会会報総目録 …… (30)

一九八四年総会特集 Ⅱ

～会場スピーチ記録～



枯葉ちる水さびし池に痩せにつつしづまる鯉はやもをなるらしも

（全集二一巻九七頁）

大久保　一昨年王学文さんを訪問するということで、柘植夫妻に託した色紙に寄せ書きをしていただきましたけれども、きょうはその柘植夫人にお見えいただいておりますので、まず生沼さんにご紹介願いたいと存じます。

生沼　一昨年この河上記念会にまかりでまして、柘植秀臣君の伝言をさせていただきました。きょうお見えになっているのは柘植先生の奥さんでいらっしゃいますが、ご夫妻で一九七九年に中国においでになって、北京飯店で王学文先生にお会いになっております。その直接の動機は、尾崎秀実の上海における活動を調べるということで王学文先生にお会いになったらしいんです。たまたま王学文先生の方から、実は自分は京都大学の経済学部の出身で、河上肇先生の指導を受けたということを聞いた。そこで柘植君が帰ってきてから、王学文先生と河上会との連絡に熱心に努力し、私もそういう話を聞いて、柘植君がまだ元気だったもんですから、そのうち東西河上会と連絡を取ろうという約束をして、実は果たさなかったんですが、一昨年でしたか、柘植君が病気で倒れまして、重体に陥ったわけです。その病床にあっても、彼は非常に信義に厚い男ですから、王学文先生から頼まれたことをどうしても果たさなきゃならないと言ってたわけです。

私と柘植君とは中学同級生です。それ以来非常に親しくしておりました。彼の人となりはここで申し上げるまでもなく、皆さんご存じだと思いますが、日本で数少ない生物学者、唯物弁証法を生物学の分野に取り入れた先駆者である。そういう人でもあって、いろんなところで活動なさいましたけれども、晩年は日中友好運動のために大変な努力をしていたことは皆さんご存じだと思います。

そういうことで、彼が明日も知らない病床にあって、私に、ぜひ王学文先生から頼まれた河上会との連絡を果たしてくれという懇望を受けま

した。東京河上会の方は白石凡さんがまだご存命で代表監事をしておられたんで、白石さんに、こういうことになってるからひとつお願いしますと言ったら、じゃ、僕が原稿を書こうということになったんですが、白石さんも病床にあったもんですから、なかなか原稿が進まない。柘植君は奥さんを通じて僕のとこへ毎日のように原稿はいつできるんだと催促があったわけです。

河上記念会の方はたまたま一海先生の講演があるということで、私がまかり出て、ここで一席しゃべらせていただいたわけです。そこで寄せ書きをしまして、それを、柘植君を通じて王学文先生にお渡ししました。王学文先生は非常に喜ばれましたが、先生は目が悪くて全然読めないんです。ところが、日本語ができるお孫さんがおられて、そのお孫さんに読んでいただいた。河上先生のお嬢さんとか、お孫さん、特にお孫さんの鈴木さんは小さいときに会ったことがあるということでよくご存じだったらしいんです。非常に喜ばれまして、それが機縁になって、王学文先生と河上記念会との連絡ができることになったわけです。

そお後、東京の方でも、白石さんに書いていただいて、これはまさに絶筆になったと思いますけれども、王学文先生にお送りしましたところ、非常に喜ばれた。

この間本誌（第十六号）で、京都大学の河上文庫に中国から学者が訪ねてこられるようになったということを伺いまして、柘植君は去年の五月に亡くなりましたんですが、こういう彼の意図は生かされていると思ったわけです。奥さんが非常にそのことを喜ばれまして、そういう機運をつくってくださった河上記念会へぜひ一度伺って、皆さんにお礼を申し上げたいということで、実はきょうお連れしたわけでございます。

（拍手）

柘植　私は何も存じ上げないで、きょうこの席に参加させていただいて、本当に大変うれしく思っております。

柘植が亡くなる前に東京の方の河上会に入れていただいてたらしくて、うわさは常々伺ってたんですが、王学文先生にお会いしましたときに、日本から台湾に亡命するときに京都で河上先生から二十円のお金をいただいて、友人たちにカンパをしてもらって、本当にありがたかったという話を、それも日本語をちょっと交えてなさってました。それはいまから六年前なんですが。

昨年柘植が亡くなりまして賞をいただいたりしましたので、北京に行き、王学文先生にお会いしてまいりました。お目が大分ご不自由になって、それでも私が伺うというので、正装をしてちゃんと椅子に座ってお待ちいただいて、本当に申しわけないことをしました。大島先生がその前にお見えになって本をいただいて、まだ読んでないけれどもとおっしゃってました。ちょっとお目がご不自由なんで、すべてお孫さんがお読みにならないといけないそうなんですけど、ちょうどその方がいまお産で寝てるから読んでもらえないなんておっしゃってました。ペースメーカーを心臓に入れてらっしゃいまして、それがアメリカのを入れたんだけど、何年くらいもつんだろうかと心配しておっしゃってましたけど、非常に記憶も確かで、頭もしっかりして、よく覚えていらっしゃるということで、できるだけご長寿を念じておる次第です。

河上会の方から寄せ書きをいただきましたのをお送りしたときも、河上先生のお嬢さんが確かこういうお名前で北京にいたはずだなんていうお手紙をいただきまして、本当に昔の古いことをよくご存じで記憶もしっかりしていらっしゃると思いました。

また、どなたか機会がありましたら、中国へ行って、河上会のことをお話しして差し上げてください。（拍手）

大久保　戦時中の物の少ないとき、甘いものが好きであった河上先生

にしょっちゅう山口からお菓子などを送っていただいた相沢秀一先生の未亡人がお見えでございますので、その当時のことなど何かお話しいただけたらと存じます。

相沢　主人はとても河上先生を尊敬し、少しでも先生のお心に沿うような生き方をしたいと願って、ずっと弱い体に鞭打ってきましたけれども、一昨年亡くなりまして、ことしの六月に三回忌を郷里でいたしてまいりました。きょうは、久しぶりで河上会に主人と一緒にまいりましたところのことを思いながら参加させていただきました。

河上先生のお世話で昭和十六年に山口高商へ参りましたけれども、物もだんだんなくなりまして、先生が甘いものがお好きだし、差し上げたいなと幾度か思うことがあったんですけれども、なかなかそれを果たすこともできませんでした。

先生がお体がお弱りになっていらっしゃることをちょっと聞きまして、あなた、伺ったらと勧めたんですけれども、学校の忙しいのと、体もあんまり丈夫な方でなかったものですから、つい、そのうちにそのうちにと延ばしているうちに先生がお亡くなりになったのを聞きまして、本当に残念に思っております。

ただ、昭和十四年から十六年までの間、東亜研究所におりましたときは東京におりまして、河上先生が刑務所からおでましになって荻窪のおうちにいらしたとき、いつも土曜日には寄せていただいて、碁のお相手をさせていただいておりました。うちの主人はものすごくへたなんでございますが、そのへたな碁に河上先生の碁はちょうどうまいぐあいに合うみたいでございまして、楽しみにして待ってるから、また来てくれと、そんなお便りもいただいたりしておりました。主人の中にはいつも河上先生がどっかにいるみたいな感じで過ごしてまいりました。

今度若い人たちが追想の文集をつくってくれましたもんですから、もし相沢をご存じで読んでみようと思う方がおありでしたら、まだ部数が残っておりますから、おっしゃっていただいたらお送りいたしますので……（『愧なきを期す～相沢秀一の人と生涯』、「追想・相沢秀一」刊行会、一九八四年八月）。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

（拍手）

大久保　相沢先生は、碁はどうも河上先生よりはお強かったようでございます。数年前相沢先生に講演をお願いいたしまして、そのときに、河上先生のような情熱をもってすれば、いまのように教育問題なんてあるはずがないと、烈々としたお話を伺ったことをいま思い出しました。

実はきょうは一番先にお話を伺おうと思っておりました静岡県沼津市で老人共同ホームをやっていらっしゃる松本さんですが、朝、受付で、ご主人の遺言だということで多額のご寄附をいただいたもんですから、つい私、気おくれいたしまして、三番目にずらせていただきました。何かお話をお願いいたします。

松本　河上会の皆さん、主人が生前にいろいろお世話になって、よく勉強させていただいてありがたいと思っております。

主人は、皆さんみたいに大学を出たりしてませんけれど、若いときに貧乏していまして、河上先生からお金をいただいて、それからずうっと先生の講演を聞いて歩いて、神戸まで行ったりしておりました。先生ぐらい正直で、理論の正しいのはないと言い続け、共産党に入りましても、河上さんの理論は正しかったんだと言っておりますような人でございました。

西川（勉）さんが亡くなったときに、あんな若くていい人なのに、河上会を発展させていく上にとても重要な人をなくした。私が身がわりになればよかったなんて言って、涙をこぼしたことがございます。主人はことしの六月の二十六日に亡くなりましたが、河上会の皆さんにいろいろ

教えていただくことが多かったので、よく感謝をしてくるようにと、それを遺言のように言っておりました。

それから、先日大門先生から何か会報に書くようにと言われましたが、私は労働者出で何もいい文章を書いたりなんかできません。ですから、きょうは、主人がふだん言っていたことだけをお話しして聞いていただくということにしたいと思います。

主人が六十歳で気がついたことは、自分がこういう民衆運動をしながら河上先生の本をうんと読み、うんと勉強して、これを労働者のものにしてあげられなかったということでした。それが自分としては情けない。この年になって気がついたってしょうがないだけども、これからでもおそくないからと言いまして、老人ホームをやる傍ら月に三回勉強会をやりました。中小企業の貧しい人、貧しい若い青年を集めまして、十一年間の間に二十二名、河上先生の本を中心に勉強会をしました。その方は北海道に行っていたり、沖縄へ行っていたり、方々に行っておりますけど、いまでも老人ホームを支えてくれております。こういうことをおそくなって気がついたんじゃ何にもならないけれど、もしもっと早く自分が気がついて皆で一緒にそれをやっていたら、きょうみたいな会合にはたくさんの労働者や労働組合の人もいっぱい来てくれて、もっとにぎやかになって、皆さんと一緒にやっていけるんじゃなかったかな、おれは本当にばかだった、六十になって気がついたんだからと、そういうことを言っているのがふだんの口癖であり遺言のようなものでした。

それだけ、ご報告しておきたいと思います。長いことありがとうございました。（拍手）

大久保　河上先生も奥さんの秀さんの内助の功であれだけのことがやれたんではないかというような感じを持つわけでございます。

今度は毎日新聞の編集委員をしていらっしゃって、今度完結いたしました第一期の全集の紹介を『エコノミスト』にしていただきました小島さんのお話を伺いたいと存じます。

小島　河上会で一番若いので、若いのも一人ぐらいしゃべらしたらいいだろうということで、若輩ではございますが、いつもお世話になっていますので、一言皆様方にお礼を申し上げたいと思います。

前列に座っていただいております宇都宮先生と川勝会長にはいつもお世話になっておるわけですが、実は河上会といいますと、まず一番親しく感じるのは、いまお話になった松本さんです。松本さんは河上生誕百年で東京大学の学生を前に、いまここでお話しされたような調子で志を持てというふうに言われたんです。私も松本さんからそのように数年前、しっかりしなさいとしかられた一人です。そういうふうに河上会のご縁も、松本さんあたりから、しっかりしてもっと皆さんのことを勉強しなさいということで勉強しておるということであります。ここにおられる皆さん方、一人一人が昭和の現代史の生き証人であり、一定の繁栄を続けている日本があるとすれば、皆さん方一人一人の、そして闘い半ばで倒れた方々のご苦労が今日の繁栄につながっておると、かように思っておるわけです。

松本さんのご主人がことしの六月に亡くなられたというのは初めて知ったわけですが、私は仕事柄できるだけ皆さんのひたむきな闘い、ひたむきな活動を少しでも多くの方に知っていただけたらということで筆をとっておるわけです。数年前、沼津の松本さんのおうちにお邪魔しましたが、松本さんの養老院というのは、労働組合運動などで一生を棒に振って、家庭さえ持つことができなかった人々の憩いの場であります。この養老院はかつては総評などが支援していた。しかし、いまの総評も革新政党もだれも支援してくれない。もう倒産寸前だ。そういうことで、新聞紙面で報道して、多少の注意を喚起する必要もあるだろうと思って

記事にした次第であります。

去年河上全集が発行されたときに、ある講演でアンケートをとりましたら、河上肇に関する学生の認識が非常に薄い。そういうこともありまして、私は当時『エコノミスト』の編集次長をしておりましたので、河上肇のことを一般の学者の先生方を通じて紹介するのもどうかと思って、川勝会長のお名前で、川勝さんの読んでおられる河上肇なるものをご紹介したわけです。きょう、川勝会長がお見えになったのもそれがご縁の一つかと思って喜んでおるわけです。

話のついでに、去年の会合で、ここのお住職、先代橋本先生が病中最後の仕事として、中国に大蔵経百巻を送る運動を進めているというお話をされたことをご記憶の方もあるかと思います。もう死期迫っておられた先生の志を受け継いだ東京のお坊さん方もございまして、ことし五月無事船出しまして、中国の法然院ゆかりのお寺におさめられたということであります。

実はそういうふうに新聞には書いたんですが、非常に気がかりなことがありました。中国の仏教界から感謝の会がありまして、何人かの高僧の方々が中国へ渡られ、大蔵経百巻の引き渡し式があったわけです。その会合で非常に皆さん気詰まりだった。というのは、大蔵経は五月に船出して、中国の港には二週間後に着いておるんですが、八月になってもまだお寺に着いてない。いまの中国の持ってる問題、港湾輸送の問題が、いま中国が四つの近代化を進める上に大きなネックになっておるということを常々聞いておるんですが、大蔵経百巻が四カ月も中国の港の倉庫の中で寝たままになっとるということを聞いて、ますます中国はしっかりしてもらわにゃいかんというふうに思っておるわけです。

最初申しましたように、もう五十近い私が一番若年という河上会自身もちょっと不自然でございまして、これからもっともっと若い人が、ここにおられる皆さん方の足跡を踏んで、この河上会の伝統を子々孫々に伝えていくというふうにやるよう、私どもも頑張っていきたいと思っております。今後ともよろしく御指導賜りますようお願いいたします。

（拍手）

大久保　いまおっしゃったようなこと、河上会では非力でできておりません。そのことを、音読会という形で実際に若い世代に伝える努力を続けておられ、さきに『「貧乏物語」の世界』を出版され、今度また、『「自叙伝」の世界』をご準備なさってる塩田先生にお願いいたします。

塩田　おしゃべりのかわりに、最近書きました短い文章を読ませていただきたいと思います。音読会ですから、私はしゃべるより読む方が仕事なんで……。地元のある新聞に、いつも短い随想を載せております。

ちかごろ都で流行るものに、音読会症候群と呼ばれるきわめて健康的な文化現象があり、その発生源は河上肇音読会とみられる、という噂を耳にする。ちょっと出来すぎた話という気がしないでもないが、私も患者の一人という自覚があるから、事情を明らかにしておきたい。

一九七九年（昭和五四）秋に河上肇生誕百周年の記念事業が盛大に催されたとき、これほど広大な国民的影響力を持った社会科学者はわが国では稀有であろうと敬愛の念を新たにしたが、しかし、ありし日の河上先生の面影を偲ぶという記念の仕方では、もう限界が近いという時間の流れをも認めないわけにいかなかった。そこで、この歴史的人物を未来のなかに生かす方法を工夫する必要があると考えて、「音読会」を思いついた。知恵と縁の下の力を出し合った人びとは、専門研究者とは限らない、大学院生、ＯＬ、労働組合・婦人運動・市民運動の活動家など多彩であった。

まず河上の代表作のひとつ『貧乏物語』を、毎月一回集まって皆で音

読したうえで、各分野の専門家から内容にちなむ講義をきいて感想をかわした。その成果はすでに『河上肇「貧乏物語」の世界』（法律文化社）と題する単行本にまとめられている。

この試みをつうじて発見したことは――というより私としては予想が的中したわけだが――音読が書物の味わい方としてきわめて有効だということである。幸いに、「あめんぼ座」という興味深い朗読集団を主催しておられる西垣堅子さんから、手を取って導いていただいたので心強かった。

「〝貧乏〟という一つのテーマで、よくもまあ、こんなに何人もの講師にいろいろちがった話をしてもらえるものだと、感心しています」という参加者の感想にも接したが、すぐれた科学的研究が、永い生命力をもって今日の私たちの国民生活と深く結びついていることの証明であろう。

いずれにせよ、『貧乏物語』から『自叙伝』へ、そしてまた『貧乏物語』へと、テキストを往復させながらつづけているうちに、このささやかな集団作業はしずかにひろがり、根をおろし、たちまち五年目を迎えることになった。近く、わが国自叙伝文学の名作を、いままでにない角度から解剖した『河上肇「自叙伝」の世界』と題する、ユニークな人物論を出版できるはこびにもなった。

「若者が少ないという気がした、惜しい」という講師の感想もきいたが、私もその事実の現代的な意味を気にしていろいろ考える。しかし、私が担当する大学新入生のクラスで、『貧乏物語』を読んで感想文を提出する宿題を出したら、ハッとするほど新鮮なレポートが多かったという事実もある。河上肇はまだ古くはなっていないようだし、まして〝貧乏〟はますます現代的な身近な問題だ。そしてこの音読会は、いかにも京都ならではという気が私にはする。

あと数日、十月二十日の河上先生のお誕生日に、いま予告いたしました本ができるはずでございます。つまり『河上肇「自叙伝」の世界』という書物なんですが、それの端書の校正刷りを手元に持っておりますので、事情を明らかにするためにちょっと読ませていただきます。

この本は、さきに刊行した『河上肇「貧乏物語」の世界』（一九八三年一月三十日、法律文化社刊）の姉妹篇です。

その本の「はしがき」で事情を説明しておきましたが、私たちが京都で一九八〇年九月から河上肇音読会を組織して、『貧乏物語』を集団的に読んだり、専門家の講義をきいたりという集りを一年間つづけた産物がその本でした。それにつづけて、一九八一年九月から二年間、河上肇『自叙伝』をテキストに、同じ趣旨の集りを催した産物が、このたびのこの本です。このたびは参加者もふえ、それにともなって会場も、診療所会議室から京都教育文化センターのひろい集会室に移りました。また『貧乏物語』が、岩波文庫版で二〇〇ページに足りない小さな本であるのにたいし、『自叙伝』は、岩波文庫版で五巻の大作なので、一カ月に一晩の音読会の席上では全巻を読みあげることはできませんでした。そこで、あらかじめ音読箇所を選定し、いわばサワリの部分を抜き読みするという方法をとりました。

そして、毎回の音読箇所の内容にちなんで、河上肇の幼・少年期、青年期、京大教授時代、研究室を去り政治的実践へ、入獄から死まで、といったふうに、生涯のそれぞれの時期に焦点をあてたり、あるいは河上肇の活動と深いかかわりのあった大山郁夫や山本宣治と河上とを対比してみたり、さらに河上肇と宗教、河上肇と文学などのように問題点をえらび出したりして、それぞれのテーマにふさわしい講師を地もとや東京

から招いて講義していただく、という方法をとりました。二年間で、録画や録音の視聴を別として、延べ二十余人の講師の御協力を得ましたが、そのうち、書物にまとめるという観点から、十一人の講義をこの本に収めさせていただきました。ここには収録できなかった宮川実、田村敬男、井上喜代松、西口克己、和田洋一、真下信一、畑田重夫、足羽徳の諸先生に謝意を表し、御諒解を願います。それぞれ河上先生との個人的かかわりや、「暗い谷間」であった一九三〇年代の時代状況や、あるいは八〇年代の現局面などについて生きいきと語って下さったことから会員は感銘を受けました。さらに、音読の指導をしていただいたあめんぼ座の西垣瑩子さんに謝意を表します。

この本に収めた十一篇は、会員の学生秋元知行君が録音テープを原稿用紙におこしてくれたものに、各講師が手を加えて整理したものです。みられるとおり、それぞれの専門研究者の立場から、すこぶる個性的に語り、論じております。しかし、近代日本のもっともすぐれた思想家のひとりである河上肇先生にたいする敬愛の念と、読者の皆さんと卒直に対話したいという情熱とを共通に抱いていることは、皆さんが受け止めてくださると信じます。

河上肇『自叙伝』は、わが国自伝文学の名作として、きわめて広範な読者に深い感銘をあたえてきた古典であります。青年学生の必読書として推薦する人びとも、私の同僚のなかにも少なくありません。したがって、この作品は、すでにこれまで多くの社会科学者や文学者によって、さまざまに論じられてきました。そのなかでこのたびの私たちの本は、なにがしかの新しい視角や事実の提示、深めるべき問題提起をふくんでいるユニークな河上肇論であると私は考えます。これから河上肇研究、ひいては近代日本の社会科学研究、思想史研究がいっそう発展するために役立てば幸いと望みます。同時に、一般読者にとって、その人生に刺激をあたえる本であることを望んでいます。そして、この本を手がかりに、河上肇の『自叙伝』をはじめとする原典に、読者のみなさんが親しまれることを期待します。

このたびも編集に骨折って下さった高菅徹夫氏はじめ法律文化社の御厚意に感謝します。また、写真提供などの御協力をいただいた羽村二喜男・しづ夫妻、京都府立総合資料館河上肇文庫の竹本忠男氏、京大経済学部河上文庫の細川元雄氏、大谷大学図書館および立命館大学図書館に感謝します。さらに、ひきつづき装幀にユニークな河上肇肖像を提供して下さったヨシトミヤスオ氏に感謝します。それとともに、『「貧乏物語」の世界』につづき『「自叙伝」の世界』を世に出すことに、わがこととして力を合わせて下さった音読会会員の皆さんとよろこびを共にしたいと望みます。

ひとことつけ加えます。私たちの音読会は、一九八三年九月からはふたたび『貧乏物語』をテキストに、「河上肇『貧乏物語』と今日の国民生活」をメインテーマに、私たち自身の現在の生き方そのものをいっしょに考える方向に歩みをすすめ、本年九月から、第五期のコースに入りました。河上肇というひとは、いつまでも生きつづける生命力をもっているのだということを強く感じます。

一九八四年九月

編者　塩田　庄兵衛

以上でございます。（拍手）

大久保　いま人類史的な危機に我々は直面しておるわけでございますが、明治百年というような小さなタイムスパンでものを見るだけでなくて、陽明学、さらには仏教の立場から河上を論じていらっしゃる佐藤克巳先生に東京の国分寺からお見えいただいておりますので、お話を承り

たいと存じます。

佐藤　私、桜美林大学で経済原論と学説史を講義している佐藤でございます。

私のいとこの連れ合いが橋本省三と申しまして、京大学連事件で逮捕された。三・一五の朝は、昔は東大の入学試験が三月十五日ですから、受験のために上京して、おばの家に私は泊っておったわけです。橋本さんと一緒だったわけです。トイレへ行って帰ってきたら、ガラッと障子をあけて、刑事が私の着かえるのをにらみつけてるんです。おかしいなと思って、廊下から顔を洗いに行こうと思ったら、七人ぐらい刑事がおりまして、秘密の文書をパッと落としたもんですから、それを橋本さんがそれを足で押さえようとして格闘になって、障子が倒れる。もう大変なことになった。私も引きとめられて、昔の小さなこうりを刑事があけて調べたわけです。私は実は尾崎号堂先生の直弟子と言ってもいい人間で、その号堂の紹介状が出てきたもんですから、疑いが解かれたんですが、そういうことがありました。

実はきょうはちょっと「仏法から見た河上肇」を読みました。この安藤（重次）さんというのは前にも一度新聞の切り抜きを送っていただいたことがあるんです。私はかなり注目してるんです。それから、橋本峰雄先生が「河上肇と仏教」というテーマで書いておられるということを会報の中で一海先生が紹介されていたのを読んで、早速これを買って、東京からの汽車の中でずっと読んできたわけです。かなり考えなきゃならないような問題は、まくら元へ持ち込んで、じっくり読むんですが、きのうはわざわざ「こだま」に乗って四時間かけてこれを読んできました。金沢大学の戸頃重基先生は前に日蓮のことを書いた著書を出していらっしゃる仏教信者です。その戸頃重基先生が書いておられるのを読むとマルクス主義者じゃないかと思うほどに痛烈に仏教を批判している。結局は最後の方で、自分は仏教信者であるということを言ってるんですが、仏教からマルクス主義が学ばなきゃならない点、仏教がマルクス主義から学ばなきゃならない問題、かなり深刻な大きな問題を扱っております。私は戸頃さんに対してはかなり異論もあり、一度書きたいと思ってるんです。

私はいまやりたいと思ってることは、近代経済学とマルクス経済学の問題と、それから仏教とマルクス主義、こういう相当大きな問題です。

河上先生がやはり生涯の課題にしていたことは、科学的真理と宗教的真理をいかに統一的に理解するか、この問題だろうと思うんです。科学的真理の方はマルクス主義でほぼ満たし得た。けれども、あとの半分はとうとうほとんど手をつけずに――これには、しっかりしたものを持っているようなことを書いていますが、私は河上先生はやはりその方はとうとう寿命が足りなかったと思うんです。

仏教は科学の先を見通してるようなところがあります。エントロピーの法則の第一法則と第二法則は非常に大事な法則で、あらゆる学説は仮説であるけれども、このエントロピーの法則は仮説じゃないと言っている人がおりますが、それにも疑問を感じています。やはり仏教というのはそういう点で諸法無我。この諸法というのは物体ということです。物質はすべて実態がない。科学の哲学と言われる分析哲学の立場は、実態を認めないんです。全部関係概念でとらえるわけです。関数とか相関関係とか……。ニュートン以後の近代科学の方法は、そういうふうに実態を認めないで、関数関係でとらえる。仏教がそうなんです。仏教は実態というものを認めない。そして、不生不滅。エネルギーは不生不滅です。しかも第二法則というのは、ご存じのようにエネルギーを使うと、未利用資源から今度は使用できない方へ全部移っていくわけです。ガソリンは一たん燃したら、もう燃やせない。そういうように、だんだんエネル

ギーが残り少なくなってくる。それから、ダムの問題がある。日本でダムを一二七カ所つくりましたが、これは大変なことになります。大災害をもたらすようになる。それから、アメリカの高速道路が至るところで破壊されている。ニューヨークでも破壊されて、修理ができない。百兆ドルもかかって、手がつけられない。アメリカのあの富力をもってすら手がつけられない。だから、科学というのは、まだ深く考えなきゃならん問題があるもんですから、断定的なことは申しあげられませんけれども、核兵器もそうです。核兵器に反対しなきゃいけないし、先ほど宇都宮先生がおっしゃったように、八千億ドルもの軍事費をなくすれば、解決しますよ。この問題を経済学者はだれも取り上げてないということですが、私も経済学者のはしくれですが、全くそのとおりで、最近はだんだん経済学と人道主義とを一緒にしたようなヒューマニミックスということを唱導しだしている人たちがいますけれども、内容を読むと、まだあんまり大したことまで言ってないように思います。

そういう仏教の精神というか、核を生み出すような文明批判が大事だと思うんです。そうしないと、核にまさるようなものがまたつくられてくる。いつも反対することに追われてしまう。もっと根源にさかのぼって、核を生み出すような文明批判をやらなきゃならない。光は東より。仏教もそのままじゃ、確かに戸頃さんがおっしゃるように、これは娑婆即寂光ぞ。娑婆がそのまま寂光だったら何もしなくていいわけですから、そういう仏教じゃ困ると思うんです。

新しい仏教を考えだすというか、あるいはキリスト教も仏教も統一したような義ということを私は考えております。神の愛じゃなくて、神の義。神の愛というのは上から下がってくる。我々の求むべきものは神の義なんだ。義というのは道義。宇都宮先生のこの雑誌にも、吉野作造先生の道義ということがある。河上先生もそうだと思う。道義が一番根本モチーフをなしとったと思うんです。それが非常に大事で、河上先生を生かすというのは、そういう道義が生かされるような社会システム、あるいは経済のシステムを考えていかなきゃならない。そういう点では、マルクス経済学というのは本質論ではすぐれてるわけですから、マルクス経済学を何とか生かしていかなきゃならん。仏教に学びつつ生かしていく。

ちょっと大ざっぱな話ですが、そういう言葉をもって責を果たしたいと思います。（拍手）

大久保　大変古い話から、最新のこれから勃興しつつある経済学の話まで大変な広範なお話で、私なんか頭悪いんで、よく理解できませんでした。

この会の最後を飾るお話として、若い研究者を多数育てて、新しい学問の分野、あるいは学問の方法を切り開いていらっしゃる京都大学の池上先生のお話を伺いたいと存じます。

池上　大変なご紹介でございまして、私はただ長いと言えば、この会との付き合いだけが長い方でございまして、学生時代河上祭を主催したりしておりましたものですから、初期のころ、まだ穂積先生がご存命のころ、よくこの会場に参ったことを覚えております。かれこれ二十年以上昔のことでございます。そのころは、失業すれば、川勝という偉い人がいるから、そこへ行けと。（笑）

最近はご承知のように学内で河上祭をもつことが大変難しくなりまして、隔年になりましたり、そのために皆様方にはカンパが余り行かなくなって、恐らく胸をなでおろしておられる向きもあろうかと思いますが、まことに残念なことでございます。けれどもその半面、実は河上肇全集が卒業生の間でむしろ読まれております。

昔の学生は、学生のころはマルクスをやりまして、卒業とともに忘れ

るというのが多かった。最近さかさまになっておりまして、学生のときは、なるほど非常に慎重でございますし、教育の影響もございますから、そう簡単にマルクスの『資本論』などを持ち歩いておったら、どういう目に遭うかということは彼らはよく知っておりますので、なかなか読みません。けれども卒業しましてからの勉強ぶりというのは、まさに見るべきものがございまして、きょうもいろいろと教育のお話が出てまいっておりましたけれども、卒業いたしましてから教育を施しまするとと、かつてよりもはるかに地についた形で、科学的な調査に基づいた理論を行うのが常でございます。今日生涯教育ということも言われておりますし、関西にもいろいろと学園都市というのができるそうでございます。大学院クラスの再教育機関というものをつくる時代に入っておりまして、そういう中で、国民の生活や今日の新しい国際的な変化に十分耐え得る新しい理論というのを生涯教育の中から生み出すということが必要な時代になってまいりました。

今日国際的には中国からずいぶん留学生がお見えでございます。そのたびに聞かされますのは、弾圧されて、土の中に河上先生の本を埋めて、そしてそれを掘り出して読んだそうでございます。そういう方々の次の世代がいま日本に留学に来ておられますが、その方々が勉強しておられますのは、ことごとく日本の企業や産業および情報処理、とりわけコンピューターシステムの研究でございます。ずいぶんと熱心に勉強されまして、一年ぐらいで大学院に入ってこられ、そういう技法を身につけられます。すばらしい情熱をお持ちでございます。恐らく今後とも、中国のみならず世界各国から日本に経済学を学びに来られる方はますますふえるのではなかろうかと思います。中国の方は、まさに河上先生の名前と結びつけながら、今日の近代化をお考えのようで、その意味では、私どもも大変心強いものに思っておる次第でございます。

恐らく、今後ともさまざまな問題が出てまいりまして、学生の間ではなかなか河上祭を続けるということが、あるいは難しい年もあろうかと思いますが、どうか長い目で見守ってやっていただきまして、また卒業しましてからは、決していまの学生というのは世に言われるほど骨がないとか、そういうことではないということもどうか信じてやっていただきたい、このように思う次第でございます。（拍手）

大久保　このほか、四国からお見えの千田さん、横浜の田中文蔵さん、いろんな方のお話を予定してたんでございますが、時間がなくなってまいりました。席をこの下の湯豆腐屋さんに移しまして、ささやかな二次会を持ちたいと思います。

どうも長い間ありがとうございました。（拍手）

本誌判型の変更と投稿のお願い

本号巻頭言にもありますように、今年は本会が活動をはじめて十周年に当ります。また本誌は丁度発刊二十号となりました。ここに会員の皆さんとともにお喜び申し上げます。

この機会に本誌を次号より判型を少し小型（現在のB5判より、A5判）に活字も大き目にして読み易い、ハンディな会報と考えています。

さて中味の充実はすべて会員諸兄姉のご投稿を待つのみです。どうかよろしくお願いいたします。

なお、次号予定と原稿募集は「編集後記」欄をお読み下さい。

法然院裏口の標石。
会報がお手もとにとどく頃この椿はどんな状態でしょうか？
（花も実も落し、新芽の準備中でしょう）

安井　功氏の死を悼む

大門　英太郎

京都の畏友、田村敬男氏から全く思もかけず安井さんの訃報をうけて茫然として耳を疑った。三月二十六日午前、山科の御自宅の葬儀に、とるものもとりあえず参列、霊前に額づいて越し方の長い交友を思い、涙をぬぐってまことにつらい別れを告げて来た事であった。

思えば安井さんとは一九七二年河上肇遺品展の開催を期に「河上肇記念会」が発足、その世話人の一人にお願いした以来の交友であった。つとに安井さんは末川博先生（安井さんの清風タクシーの命名者）や住谷悦治先生に私淑、両先生の御指示をうけて、府立総合資料館の遺品展、法然院の河上肇記念会発足大会の開催のために東奔西走、心憎い許りの配慮を尽して頂いた。それ以来、安井さんは終始一貫記念会の最も力強い蔭の支えであった。

私事に亘って恐縮だが、私の記念会へのいささかの尽力を多として、往年、私が古稀を迎えた時に、小泉民次君や女婿森田茂君等と計って、私共夫妻のために雲畑の志明院に末川先生、住谷先生、松田道雄国手他有志の人々を迎えて祝宴を設けて下さった。日頃尊敬する碩学の祝福をうけて私共夫妻の忘れ得ぬ光栄である。

さて、安井さんの河上肇への傾倒振りは河上肇生誕百年祭の記念出版「アルバム評伝河上肇」（西川勉編、新評論刊、一九八〇年）の一〇〇頁（安井功）の記筆にほぼ尽くされていると思うので引用させて頂く。

＜『京都に見物に来はりましてお墓まいりに来てもらってすみませんでございました。これが河上肇先生のお墓でございます。この字は大内

兵衛先生の字でございます。それからこちらが「たどりつきふりかへりみれば山川を越えては越えて来つるものかな」これは先生が共産党に入党の許可が来た時の感慨をこめて歌われた歌です。私は難しい「資本論」も何も無学ですからわかりません。しかし私の子供が満州で、栄養失調で目がとけて死んだんです。目がとけて死んだけど、その時に私は新しい目が開かれたんです。河上先生も、戦時中物凄い栄養失調でそのまま亡くなられた。肉体は滅びても、ここに名刺入れがありますが続々若い人が来はります。先生生きてはります。私はもう六十ですが、先生の生き方ですね、すばらしいもんだと思います。それから人間を愛された事、もうちょっとないですね。どうもすいませんでした。本当に涙出まんねん、ここにお客さん案内しますとね。どうもすいません、本当に。わざわざ京都に来ていただいたのに、こんなひどいおっさんに摑まえられはって、ほんまにもう犠牲者ですわ。どうもすいません。』

（河上夫妻の墓地の片隅には安井さん手作りのふた付竹筒の名刺受がある。）≫

勿論、この名刺受は安井さんが守りをしてくれて、ここに申受けた芳名は記念会の記録に止めると同時に、安井さんにお願して夫々記念会名儀の礼状を出してもらっている。すでに千を数えると思うが、これを縁に記念会の会員になって下さった方も少くない。

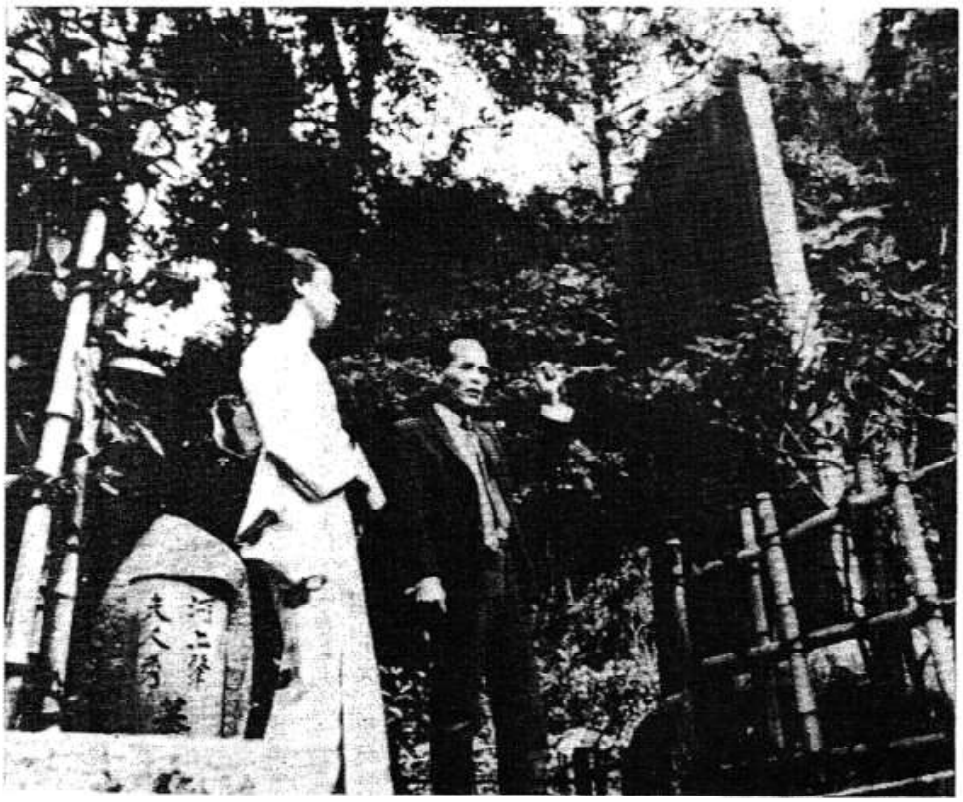
先日、令息収氏から御手紙を頂いたが、勝手ながらここに引用させて頂く。

「……ご存知のとおりの亡夫ですが、亡くなってみると、どういうわけか、良い思い出ばかりが想いだされ、今となっては、ああしてやればよかった、こう言えばよかった、と痛感するばかりです。

亡父の供養のためにも残された母に孝養したいと思っております……」

この令息のやさしい言葉を聞いて、安井さんよ、以て安らかに冥すべし。

合掌



会員通信

一、ご逝去をいたみます

いつも会報をお届け下さいましてありがとう存じます。父、堀江友広は亡くなりまして七年になります。そのおりは同居いたしておりませんでしたため、ご通知もれがあり、本日まで失礼致しておりました。お知らせと共に生前中、お世話になりまして、ありがとう存じました。御礼申し上げます。（京都市右京区　堀江友広遺族）

二、病気、老令のため欠席

さしも頑強だった残暑の苦熱も去り、爽秋を迎えました。一九八四年度総会ご案内賜わり拝読いたしました。老骨、満八七才となり、脚力が減退、ほとんど外出せず、閑居しているしだいで、欠席いたします。残念の極みに存じますが、きたる一〇月一四日には、遥かに法然院の先生の霊に景仰を捧げ奉ります。老骨、最近の心境は、先生の擬辞世の詩句、

巳超生死　又可繫船

に魅了されています。（徳島市　三村文一）

足痛のため残念ながら欠席致します。（京都市東山区　大釈春雄）

視力半盲状態のため残念ながら欠席します。手術が出来ましたら、ぜひ出席したいと、かねがね念じております。みなさんの御健勝をお祈りします。（兵庫県姫路市　内海　繁）

前略、自宅二階の階段より墜落し療養中なので、総会に出席出来ません。来年は必ず出席いたします。総会の盛大なことを祈ります。先は欠席通知まで。（東京都大田区　神辺英一）

本人、入院中につき、代筆いたしましたので悪からず、ご了承下さい。（東京都日野市　内田丈夫）

いつも会報をお送りいただき興味深く拝見致しております。小生、昨年一年間入院、現在、自宅療養中の身で、到底総会に参加出来る状態になく、失礼させていただきます。盛会をかげながらお祈りします。（埼玉県北葛飾郡庄和町　遠藤哲次郎）

家族より申し上げます。毎度お世話になりありがとうございます。長太郎、老令のうえ、今夏の酷暑で体調をくずし、入院中（九月一九日現在）ですので、欠席させていただきます。（東京都江戸川区　深沢長太郎ご家族）

総会ご案内、有難く拝見いたしました。出席いたしたいのは山々ですけれども、ただいま、入院加療中ですので、残念ながら欠席させていただきます。ご盛会を祈り上げます。（岐阜県大垣市　高橋順吉）

陳者、小生近頃、健康がすぐれないので、総会には欠席いたしますから、なにとぞ、ご諒承下さい。貴会の繁栄を祈ります。（東京都目黒区中村　達）

私事、脳血栓、中風の再発にて、出歩きが不自由。欠席いたしますが、内臓はしっかりしておりますので、まだまだ余生をたのしむ心づもりです。手足がぐあい悪いだけでなく、目の方も白内障で、新聞も小さい字が見えぬぐらいですが、小さい時から見えぬ人もおられることを思えば、しあわせの方です。皆様と共に永生き致しましょう。九月二四日。（大阪市港区　野島忠夫）

小生も八四翁となり、変形性膝関節症に悩み、歩行もままならぬ身となりましたが、第二期、河上全集をこの目で見ることは出来そうです。若い世代に、この全集を、じっくり読んでほしいと思う日々。記念会世話役の皆さんのご健勝を念じつつ。九・一九（京都府向日市　寿岳文章）

記念会のご盛会を祈り上げます。五九年会費につき、再度にわたり、報告下されありがたく存じました。老令にて、健康のため欠席します。お許し下さい。（京都市中京区　田村浅雄）

河上先生の記念会、まいどお世話に相成りどくろうに存じます。小生一昨年以来、眼疾、難聴等、老化現象すすみ、歩行も困難になっていますので、外出が意に任せません。恐縮ですが欠礼させていただきます。元気を出して、再度健康を回復、諸兄のき尾に付して難局を切りぬくために努力する念願を持っていますが、皆さんにあしからず。（京都市右京区　木村京太郎）

会報一八号、有難く拝受いたしました。所載の記録をいずれも感銘ふかく味読させていただきました。しかるところ、小生、四年前から健康を害して、長時間の坐席に堪えられぬため、総会に出席かなわず、まことに残念です。西宮から当日のご盛会を祈り上げます。

「世界」一〇月号に掲載の「河上肇と佐々木惣一」も謹読いたしました。河上先生を欽慕する気持は、いささかも変っていません。旧作拙詠

河上先生の墓に詣りてそばに建つ歌碑を眺めて法然院を出ず

（兵庫県西宮市　石井公代）

いつもながら、失礼いたします。皆様のご幸福を祈ります。小生、老令と病気療養中なので、残念に思いつつ、その日を偲んでいます。（大阪府貝塚市　尾崎義一）

さきに一九八四年度総会に出席するよう返事を出しましたが、身体の都合上、欠席いたします。さよう、お取計らい願います。（長野県伊那市　北原　邁）

いつも出席がおそいので、今度は定刻前に着くよう夜行で行きます。（北原氏の前便）

いつもながらお世話様になっていることを、心から感謝いたします。よる年波、心も行動力も意にまかせず、不十分な日常を過しております。右記の事情、出席出来難い次第、なにとぞ、ご諒承願います。河上肇記念会の発展を祈ります。九・二四（岡山県井原市　真砂一之）

ご案内、有難う存じます。ぜひ出席させていただきたいと存じますがいまだ体調とととのわず、ご迷惑をかけますことも心苦しく、来年を楽しみにしながら、本年は遠慮させていただきます。東京より、ご盛会であらんことを祈り上げます。かしこ　（東京都杉並区　白石美智子）

三、

河上会がこれからも、営々とうけつがれ、社会と人生を学び、反省する心の糧として、発展することを心から願っています。私は老境の極地に到り、ご協力出来ず、まことに申訳ない次第です。ご盛会を祈ります。（京都市左京区　住谷悦治）

ことしの大会は、河上先生全集第一期の完了の年でもあり、さらに先生のゆかりの方々が引き続いてなくなられ、その追悼の気持からも、ぜひ出席したいと考えていましたが、止むを得ない所用あり、残念ながら欠席いたします。講師の川勝伝様には、わけてよろしくお伝え下さい。（神奈川県　逗子市　脇村義太郎）

四、遠方のかたがた

いつも会報をお送り下さいまして有難うございました。一度は総会に出席したいと思っておりますが、なかなかその意を得ません。私は京都大学には全く縁のない存在ですが、終戦の混沌とした時期に、友人の父の書斉で、「改造」に先生が連載されました『第二貧乏物語』の単行本を発見して読了し、その時の感激はいまも忘れられません。×××の伏字の多い本でしたが、私なりに判読し、その後、先生の著作を勉強させていただき、先生と同じように実践活動にもはいりましたが、T・B・の持病があるため今は表記の商売です。そのうち必ずお伺い致します。

（宮崎県都城市　小野総一郎）

会報、いつもありがとうございます。総会には欠席させていただきます。全集も、未読の巻がたまる一方で、余りの不勉強が恥かしくなります。小生も加わっている、ある研究会で、河上肇についてリポートすることを引き受け、来月の報告までに何とかまとめようと思っています。では又。九月二二日。（千葉県市川市　後藤　進）

いつも会報を送っていただいて有難うございます。とくに最近は、会報の内容もさることながら、会の組織や活動が充実し、活発になって来ている様子がうかがえて、本当にうれしいです。毎回、どていねいに、ご案内いただきながら、総会や墓前祭、欠席ばかりで申し訳なく思っております。盛会をお祈りします。（高知市　中谷武雄）

稲の刈り入れが最盛期に迫った飛騨路です。会の活動のために日頃、努められ、何かと大変なことと思います。充実した内容の会報、毎号楽しく拝読させていただいています。総会に一度は出席させていただきたいと思いつつ、今年も駄目でしょう。会のご発展を心からお祈りいたします。（岐阜県高山市　池之端甚衛）

若い頃、ロマンチストであった小生、いろいろに勉学の末、河上博士の『第二貧乏物語』を読んで目のうろこが落ちるような感激を受けました。以来、河上ファンとなり、そしてマルクシズムの研究に今日まで到りました。

たどりつきふりかへり見れば山川を越えては越えて来つるものかな

これが気に入った歌で、床の間に掲げています。第一期全集の完成を喜びます。いつも総会に出席出来ず残念です。（和歌山県有田郡広川町　柳淵泰助）

期日におくれましたが、一応、欠席の連絡を申し上げます。全集をところどころひろい読みしながら、河上先生は一人の経済学者というよりも日本の社会の転換期におけるすぐれた思想家であったことがわかり、感銘しております。

河上先生がこよなく愛した法然院のたたずまいに、一度接してみたいと思いながら、その機を得ず、残念です。総会の成功を祈ります。（長野県木曽郡開田村　山下千一）

京大、経済、昭和一二年卒業のものです。会報、毎号、興味深く、またなつかしく拝読しています。総会にいちどは出席いたしたいとおもっ

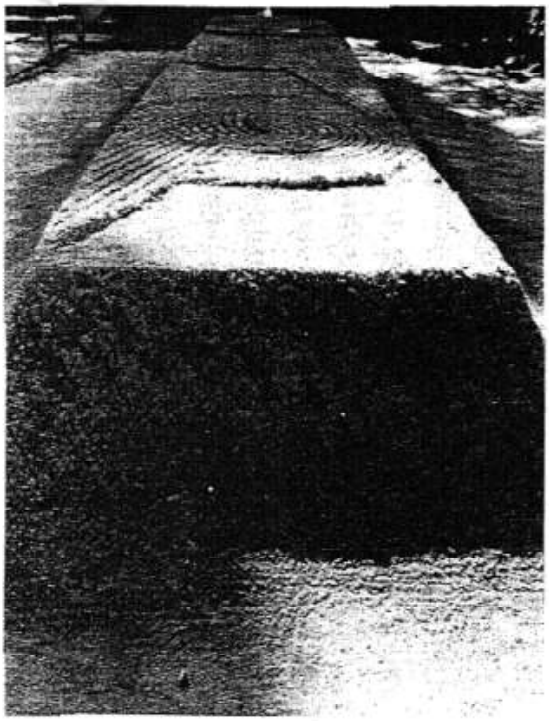
法然院山門の石段

ていますが、当分のあいだ、果たせそうにありません。会報編集担当の方々のご尽力に感謝し、貴会の発展をお祈りします。（東京都練馬区　中村　浩）

私事、多忙につき、欠席せざるを得ません。私は大正一一年京大卒の教え子です。（宮城県仙台市　丁子　忠）

はるか、みちのくから総会の盛会をお祈りし、河上大先輩の偉業をしのびます。残念ながら出席出来ません。九月二八日（岩手県盛岡市　横田綾二）

遠隔地にある私は会報をみるたびに記念会に出席して河上肇に私淑する人々の雰囲気に浚りたいと思い続けるばかりで果せずにおります。私も還暦をすぎ、河上肇が出獄して閉戸閑人で物不足の中で生きた年になりました。今あらためて曲折をきわめた河上肇の人生の軌跡を考えて、感無量です。ブルジョア経済学と人道主義の域を出なかった貧乏物語、櫛田民蔵の批判を契機にいのちがけの飛躍、マルクス主義への新しい旅立ち、そして経済学大綱、資本論入門の名著、そして実践活動――書斉から労働者の中へ、投獄――とあれこれ考えると胸がいたみます。



法然院庭のもり砂

私はマルクス主義の真理は不滅と思っています。戦後のマルクス研究の花ざかりの時がすぎ、若者の書籍放れを青木、大月書店の経済状況にみる昨今です。この河上会の若い世代への継承を切に思うものです。六三才の誕生日、九月二〇日記。（秋田県横手市　和泉とく）

秋の気配が少しずつ濃くなってきました。あと一ケ月もすれば雪を見られようかという今日このごろです。当方、貴会の会合等に出たいと思うのですが、京都はあまりに遠く、おいそれと出かけられません。会報の報告等を読んで出席したつもりになるしかありません。いつの日か、旅をかねて出かけたいと思います。事務局、いろいろ会務で大変かと思いますが、がんばって下さい。（福島県南会津郡館岩村　鈴木元夫）

秋めいて参りました。総会に一度、出席したい思っておりますが、遠いことと、忙しさにまぎれ心ならずも失礼しております。どうぞご参加の皆様によろしく申し上げて下さい。（神奈川県秦野市　露木公一）

ご案内ありがとうございました。今回も遠路また所用のため残念ながら出席出来ません。次回入洛のおりには、ぜひ、墓参いたしたいと念じております。（東京都杉並区　渡辺真澄）

当日は残念ながら、欠席いたします。先週、京都出張のおり、法然院を訪ねることができました。今回でたしか三回目だと思いますが、いつもながらの静かさでした。ご盛会をお祈りします。（東京都世田谷区　山崎　弘）

会報を拝見するだけの会員です。もっとも、以前、東京河上会の会報に「河上肇の思い違い」という一文を草したことはあるのですが。九月二四日。（東京都世田谷区　上杉捨彦）

総会は欠席させていただきます。会費を納入するだけの会員ですみま

せん。いつかは、総会に参加したいと思っております。今後ともよろしく。（長野市　加藤孝一）

故先生の行われた道の生きた証人となった私は、その業務上の負傷のために、頭部外傷後遺症がいよいよ悪化し、執筆も不可能です。結果、出席は未定と申し出るよりも、不可能になると思います。搾取の上の生命の侵奪にあい、先生が全部を投じ下さった学問を私は識り得ました。皆様の人生観に生命観と記念会のご進展をただただ感謝を表しまして、擱筆します。（名古屋市南区　山口幸一）

だいぶん、秋めいて参りました。今日はなんとなく蒸し暑くて、街を歩く人も、上衣は手に半袖姿の人が多いようです。

今度こそはと思いながら、なかなか参加できません。いつかおりを見てお墓参りだけでもと考えております。（愛媛県松山市　井手　良）

今年こそは総会に出席しようと考えていましたが、やはり都合がつきません。どうか不悪。

さて三〇年以上も前のある日、世界思想社版の『自伝』を手にしたのが、河上博士の著作との出会いでした。私が愛読しているのは『河上肇詩集』（筑摩書房）でして、おりにふれては拾い読みをしています。きな臭い世の中になってきた今頃、博士の一途の生涯がしのばれてなりません。（鹿児島市　網屋嘉行）

五、所用など

今年は参加出来るかと思っていましたが、他にのっぴきならない用件が出来まして、欠席させていただきます。残念です。河上肇全集、全二八巻完了しました。私は経済学関係には無縁の者ですが、とにかく揃えました。ぼつぼつ頁をめくってみたいと考えています。第二期が一二月から始まるようですが、これも揃えたいと思います。自叙伝は文庫本で読みました。感銘しています。（岩手県盛岡市　熊倉　弘）

この総会の頃は期末試験、その採点といろいろ忙しく、残念ながら、欠席いたします。来年以降、出席出来るよう何とか考えたいと思っています。京都方面を通る時は出来るだけ法然院に立ち寄ることにしています。これも博士をしのぶ一つの在り方と勝手に決め、京都駅からバスで浄土寺バス停まで行き、お参りしたら、また、バスで駅まで帰り、なるべく心の乱れないうちに京都を去っています。（福岡市南区　阿波保喬）

虫の音も日、一日とにぎやかになりまして、秋たけなわです。記念会会報が号を追うごとに充実しておりまして、楽しみに読んでおります。河上さんの法要にはぜひ一度参加したく思っておりますが、公私多忙でなかなか思うように、日程がつくれません。残念至極でなりません。世相も日毎に「きなくさく」なって参り、憂い深くなる日日です。河上さんの人格が身にしみて参ります。（山口県防府市　上田　隆）

中川先生は来年八月一杯、英国に留学されておられますので、残念ながら、欠席とさせていただきます。（広島経済大学事務部　代筆　中川栄治）

招集している会議がありますので、残念ですが欠席いたします。（大阪府岸和市　田辺　平）

川勝伝さんのお話をききたいとおもいますが、残念ながら出来ません。大門英太郎さんによろしく。（大阪市旭区　帖佐義行）

当日、ゼミ生の結婚式のため欠席させていただきます。皆様によろしくお伝え下さい。（奈良市　小野一一郎）

一〇月一四日は以前からの旧友の会合と重なり、既に出席を約一ヶ月前にしております関係上、あしからず、欠席をご了解を願い上げます。（京都市北区　吉田吉太郎）

六、河上先生と私

私は昭和一一年の夏休、農学部の学生でありましたが、ふと、親父の

書棚から改造社、経済学全集の『経済学大綱』を何気なく取り出して、よみはじめて、まったく新しい世界に引き出された感がしました。そして社会現象の中にも一定の法則があることに目を開かれました。まったく迂遠な話ですが、当時の一般的な理科の学生はそういう程度ではなかったかと思います。この書物によって私は躊躇なく農業経済学の道を歩きはじめ、農業史をやるようになりました。そのあげく、現職（下関市立大学学長）を勤め、経済単科大学で専門の先生方とやっていけるようになりました。私にとって学恩深き『経済学大綱』であり、河上先生です。（山口県下関市　山田龍雄）

私は大学の卒業論文に「河上肇を中心とした日本資本主義発達の社会学的考察」というものを昭和二二年一〇月に書きました。そのときから河上博士は私の心のなかにあります。人道的学者としての河上博士、マルクス学者としての河上博士が一人の人間として統一されて、日本資本主義の発達とともに、我国の終戦まもなく逝くなられましたが、今日までに求めることの出来ない素晴しい人です。私は常にその生き方を尊敬しております。まだまだ未熟ですが、これからも一層の勉強をいたしたく存じます。（茨木県土浦市　竹内　猛）

こんな思い出があります。たぶん、大正一四年の秋だったと思いますが、木造の階段教室でした。先生が、例の和服姿で原論の講義の最中、遅刻してはいって来た学生の後について、野良犬が一匹ヒョロリと迷い込んで来ました。先生はジロリとこれを見やって、一言「私の教室にイヌがはいって来た。」と洩らされました。私たちは一瞬、息を飲みましたが、その後、どっと湧きました。古い時代のなつかしい思い出の一コマです。（昭3、経済）（京都市伏見区　岡林　事）

私が京大（法）に学んだのは昭和三年三月から。その翌月四月に河上さんは京大を去りました。時計台下の大講堂で河上さんの辞任の挨拶を聞きました。河上さんとの関係はそれだけ。私は七八才になりますが、七七才以下の人はみんな河上さんを知らない。それなのに河上肇記念会総会には多数の人達が集る。全く奇異なる現象です。いま、郷里の「東海愛知新聞」に「仏法から見た河上肇」を登載しています。いずれ五〇部ほどコピーして総会までには貴局あて、お届けいたします。草々。（愛知県岡崎市　安藤重次）

昭和二、三年頃、河上先生の経済原論を感激を以て聴講した一人であります。いつも羽織袴の和服姿で、教室へ入られるとまず、多分研究室等のものでしょう。鍵の束を音を立てて机の上へ置かれ、それからおもむろに講義に入られるのが常でした。低声ですが、実に真摯な、学者らしい態度を崩されず、黒板に書かれるのは、ほとんどドイツ語でした。高等学校で文乙でよかったと思うことしばしばでした。またその頃の講義ノートを読み返してみると、じつに名文で、さすが漢籍の素養のある方は違うと感心させられました。試験論文の課題は「余剰価値を論ず」であったと記憶します。当時、和服の先生がかなりおられました。哲学の西田幾太郎先生もそうであり、フランス語の落合太郎先生、真夏の暑いさ中「咄家のようですが」といちいち断られてから、紹の羽織を脱いで講義なされたユーモラスなお人柄がいまだに忘れられません。その他経済原論、高田保馬先生、財政学、神戸正雄先生、経済史、本庄栄治郎先生、経済地理、黒正巌先生、保険、交通論、小島昌太郎先生、民法、末川博先生、刑法、滝川幸辰先生、枚挙にいとまありません。綺羅星のごとき京大教授陣。他より羨望の的でした碩学の良師に恵まれた良き時代であったと感謝しています。（京都市北区　岩佐氏熙）

岩波文庫、昭和二年一〇月六日発行、訳者、河上肇、実川実の資本論第一巻、第一分冊を書架からとり出し眺めています。経済や社会を見る眼を私あて教えてくれた本。昭和一一年であったと思う。私にとって一

つの転機となった。あの頃の思い出はつきない。昭一四、京大経済卒。（京都市西京区　松尾賢一郎）

毎号拝見しているうちに、ときおり、小生京大経済在学中（大正一一～一四）教室にてJ・S・ミルの経済原論講読、キャンパスや附近の路上にて、また当時盛んに行われた河上、福本論争の会場にて、常に和服姿の真摯な先生の面影が彷彿といたします。六〇年を超えた往事となりましたが。本年も差支えて総会に欠席をおゆるし下さい。（大阪府堺市　尾形繁之）

小生も満八〇才の老令となりました。京大経済学部を卒業してから、五六年経過しました。京大時代、河上先生の経済学大綱の講義を教わり、経済学批判会で討論に参加したことを、なつかしく思い浮かべます。大学卒業後、報道界に入り、共同通信社常務理事を最後として目下、フリーです。現職としては、非常勤ながら「財団新聞通信調査会」の理事をやっています。（東京都中野区　滝口義敏）

いつも会報ありがとう存じます。私がマルクス主義にふれたのは昭和九年だったと思いますが、小工場の労働者でした。高畠さんの全集は出ていたが、訳が間違っているときき、資本論は河上さんの岩波文庫版五分冊を買って、通勤電車に身体を横にしながら、また、工場ではひる休みの三〇分のめしを大急ぎでたべて、河上資本論を油まみれの手で少しずつよみかじったものでした。これらのなけなしの文献は昭和一三年九月の共産主義者団の一斉検挙のとき、皆没収されましたが、いまも冒頭の句「資本家的生産の支配する諸社会の富は一個の恐しくぼう大なる商品の集大成として、個々の商品はかかる富の原基形態（エレメンタルホーム）として現われる。故に、われわれの研究は商品の分析をもって始まる。商品はまず云々」を鮮明に覚えています。それ故、戦後の「資本主義的生産方法が支配する―云々」の訳はなんとなくなじめない感じです。昨年春、脳血栓にかかり、乏しい年金生活者なので、一度墓参りなどして、先生を偲びたいと思いつつ果せないでいます。お世話下さる皆さんに厚くお礼申しあげます。総会のご盛会を！（奈良県五条市　福本正夫）

終戦直後に私が経済学を勉強しようと思い立った時に、父が「それならまず、河上先生の『近世経済思想史論』を読め」とエライ勢いで申しました。まことに平々凡々、薄志弱行の父ですが、その彼が大正末から昭和初期にかけて、本当に感動して読んだのが、このあたりの一連の先生の書物であったのです。そして私も、この本や『資本主義経済学の史的発展』をやはり感動して読みました。何とかして第三の世代に、この感動を伝えたい、とこのごろしきりに思います。（宮城県仙台市　吉田震太郎）

七、故人に

谷口吉彦博士令室敏子刀自、八六才でこの夏逝去さる。奇しくもご夫妻そろって一二日という命日でした。さて記念会にいつもご出席の末川、蜷川両先生すでに亡く、ユーモアたっぷりに焼香の仕方を訓えて下さったご住職も遷化されました。末川博士が焼香は三拝三揖するものでないとの戒めをハアーと点頭されていた光景を懐います、河上先生に似ていると。その道の専門家には心から敬服する先生を懐慕。岩波の全集決定版によって戦後の有志の台頭を寿しつつ、一筆、欠席のおわびまで、不尽。（九・二四）旧河上、谷口教授室、臥牛老。（京都市上京区　田中真三郎）

総会案内会報をいただき、始めて大島清先生の逝去を知りました。まだまだ語らなければならないことも、たくさんあったろうにと残念でなりません。先生のご冥福をお祈り致します。合掌（茨城県常陸大田市　山田健雄）

会報一八号をありがたく拝受、拝読いたしました。大島、大河内両先生は存じ上げていますので、感慨を新たにいたしました。総会は先約の都合で失礼いたしますが、ご盛会を念じます。九月一九日（東京都文京区　布川角左衛門）

ぜひ伺いたいのですが、この夏、体調を崩し、まだ遠出をいたせず、失礼いたします。先生とご縁の深かった大島清先生、大河内一男先生もいらっしゃらなくなり、今はただお偲び申し上げるばかりとなりました。婦人問題にも深くかかわって下さった大島清先生とは、ご一緒に共著も出しましたので、当時のご苦労を時折、想い出しております。（東京都世田谷区　丸岡秀子）

今回の会報で、法然院の住職、橋本さんが死去の由、若くてお元気だと拝見しており、文章の本を読ませていただき、親しめる人だと思っていましたのに、惜しいことでした。ご冥福を祈ります。（京都市右京区鮒子田泰生）

八、近況など

かつての同僚、一海知義さんからのお知らせで入会いたしましたが、その後一回も総会に出席せず、申訳なく思っております。法然院には、夫婦でお伺いし、墓参はいたしておりますが、内容の充実した毎年の総会の様子を会報で読むたびに、来年は是非出席しようと思っておりましたが、今年も残念ながら欠席の止むなきに到りました。（神戸市灘区　水野　武）

久しぶりで今年の総会には出れると思っていたのですが、引越のゴタゴタがまだ片づかず、それに『私の哲学六十年』という自費出版の校正と重なりましたので残念ながら欠席いたします。『河上肇全集』の第一期が完成し、毎月これを通読するのも大義ですネ。（愛知県岡崎市　船山信一）

先日香川尚道先生（大経大、貿易論担当）に入会をおすすめしておきました。福井先生のご生前ならお誘いのことと思いまして。（大阪府堺市　稲原康雄）

残念ながら欠席いたします。鬼に笑われても、来年は出席いたします。一〇月一日（大阪府茨木市　岡橋　穣）

総会には参加不可能なため別便にて拙著、反戦歌集『雪嶺』（一九八三・一二・二五）を謹呈申し上げました。六六頁は京都にゆく度にお参りしますが、その時に「赤旗」に投稿したものです。わが開眼の師の訓えに従い老躯に鞭打ち斗っています。（千葉県松戸市　高沢義人）

全集もいよいよ第二期に入ることになり、自叙伝の面目一新ぶりに期待しています。田舎の一定時制教師である小生には近況報告とてさして変ったこともありませんが、今夏は、卒業生数人と広島―岩国―京都をまわり、綿見の生家、岩国学校を撮らしていただき、京都では〝市民の戦争展〟での河上さんのコーナー設置に喜び、翌日は安井さんの清風タクシーのお世話になって墓参を果すことが出来ました。卒業生の人たちからも喜ばれました。意義ある夏休みだったと思ってます。（北海道小樽市　西垣邦夫）

事務局より

ご旅行の際の河上に関係ある写真お送り下さい。

所用のため残念ですが欠席をいたします。いままで一度も出席したことはありませんが来年は出席いたしたいと存じております。河上先生のお墓へは三度ほどお参りしたことがございます。（東京都千代田区　武田昌輔）

教師を退いてから三年が過ぎました。勤務中は時間単位の生活に追われてきましたが、現在は周囲の自然にかこまれた山村で年単位の生活に馴染んでいます。このような中で二〇年前に買った河上先生の『自叙伝』

（岩波書店）の四巻を読んでおります。（茨城県那珂郡緒川村　山口春男）

先月九月一五日京都で教職員のあり方懇の「許すな教育臨調」の学習交流があった折、一〇年振りぐらいで先生の墓に五人で詣でました。総会の様子をいつも読ませてもらっていますが、出席するにはどうも歳が若すぎる（四七才）ような感じをもっています。ゆかりの山口県で交流会でも持たれれば色々とお付き合いも出来て楽しいのではないかと思っています。（山口市　河村敏雄）

今、父の思い出ばなしを刊行すべく、二人で話をテープにいれています。（出版社ケイヤクズミ）河上先生のはなしがよく出てきます。（京都府向日市　寿岳章子）

わたくしは五四年四月河上先生の墓に夫婦してお参りし、墓傍の竹筒に名刺を投入して帰りました。その後貴会よりの入会のすすめがあり、入会し、今日にいたっているものです。若いころ先生の書物による薫陶を受け、人生の方向が決定した感もあります。昭和五年郷里埼玉で教職を追われ、大陸に渡り戦争を経て帰還、東京にて小学校、保育園に勤務し、現在七五才、すでに「陋巷漬貧」の身です。貴会の発展を祈念してやみません。追伸、すでに『河上全集』もそろいましたので、出獄後の詩文を座右の書として、老残を通したいと思っております。（東京都練馬区　金子　楽）

年をとってまいりますと、本当に学生と心を拓いて話をするためには、河上肇先生のような未来に対する烈々たる情熱がもっとも大切だと思うようになりますが、河上先生のほんの足にでも近づくのは至難のわざのようです。（埼玉県浦和市　山田　貢）

一度はと念じつつ、未だついに総会への参加が実現しておりません。今回もすでに予定が入っており、残念ながら欠席と相成りました。いずれ亦、機会を得て、法然院には墓参をと思っております。丁度、当地では保革対決の県知事選挙の真最中となります。せいいっぱいの努力を持しつつ、実りある盛会となりますよう祈念します。（岡山市　岸本竹志）

以前に山田盛太郎先生から伺ったことなどを中心に「河上肇と山田盛太郎」というテーマで何かまとめてみたいと思いましたが、果さないままにすごしています。このところ、もっぱらナチ・レジーム下における「ユダヤ人問題」の研究に関心を集中しております。八四、九、二五（京都市右京区　大野英二）

私の世代は河上先生を存じ上げませんが、戦後、京大で河上祭を盛大にやったことは、なつかしく回顧しております。目下奈良女子大学で、日本近代史の教育と研究にたずさわっておりますが、日本の現状に憂色の濃い昨今です。八四、九、二五（大阪府東大阪市　中塚　明）

大門英太郎さんのご健康、ご自愛をいのります。八四年総会には小生欠席させていただきます。九、二四（埼玉県浦和市　小倉倉一）

九、全集、会報その他

いつもご案内いただきましてありがとうございます。また会報、心楽しく読ませていただいております。（奈良県大和高田市　土庫病院）

京都におりました頃は何度か訪れた秋の法然院、なつかしく思い出しております。皆様、ご気嫌よくお集りの日をお過しになりますよう。（大阪府枚方市　稲垣千代子）

会員にはとおいファンのつもりにて、会報はすべて含味いたしおり、（京都府舞鶴市　木下祐一）

本年度総会のご案内ありがとうございました。いつも欠席で申訳ありません。今度も当日同時刻より他の会合の先約有之、失礼いたします。会報は毎号楽しくよませて頂いております。なお、岩波の全集も今月で第一期二八巻の完結となりますが、早いものです。編集の先生その他の

方々のご苦労を思います。このごろ、日記および書簡集をよみながら河上先生その人にじかに接している感、ひとしお深い思いをいたしております。（京都市北区　小林義治）

一七号は入院中の八月二五日に入手しました。ちょうど「河上肇全集」二七巻（一六～一八年書簡集）を読んでいました。戦時中の食事事情悪化の中で、親類、友人よりのいろいろな食品、野菜、果物のカンパ、先生の文面中に喜びと食べる楽しさがあふれるように感じると共に、先生に対するいろいろな人々の心づかいや先生の健康に対してこまかい態度など、先生が益々身近い、親しみ易い人になりました。一八号は一九日（水）到着しました。会報を読むたびに編集しておられる方のご苦心ご努力に心から感謝します。全集にない河上肇博士の一面を楽しんでいます。総会には残念ながら、体の不調のため出席出来ません。（北九州市八幡東区　山上繁喜）

折悪しく出席できませんが、中曽根総理が戦後政治の総決算などと称して、政党法をたくらむなど、重大な情勢だけに、河上先生をしのぶ思いもあらたに、力一杯、頑張りたいと思います。（大阪府吹田市　橋本敦）

いつもながら、妙味に富む会報の内容です。小生と同様、会報にたずさわる方々も、ご自分の仕事を持ちながらのこと、多忙なことと敬服いたします。高度成長期のモウレツ・サラリーマンから解放されたと思ったら、今度はロボット化、情報化による人員合理化で、職場の過重労働は変りません。河上先生の理想社会はいつ、の思いです。（茨城県　水戸市　河原井忠男）

残念ながら欠席いたします。ぜひお伺いしたいと存じておりましたが……。来年はかならず出席させていただきたいと存じております。安井功様によろしく。（東京都目黒区　松　俊夫）

会報、興味深く読んでいます。また会報により旧友の消息を得ることもできました。御礼申し上げます。（神戸市須磨区　湧井安太郎）

一〇、会の事務

八月末、一年間の英国留学を終って帰国しました。本当に快適で充実した一年でした。その間ずっと会報をお送りいただいてありがとうございました。振替用紙を同封していただきましたが、会費がいつから未納になっているのか、お手数でも折返しおしらせ下さい。（名古屋市昭和区　都丸泰助）

事務局より、八三年まで会費いただいております。

ご多用中のところ、バック・ナムバーお送りいただきありがとう。別便でも申し上げましたように一五号のみが欠けておりますので、ご面倒ながらお送りいただけませんでしょうか？寸志ですが、お礼の一端として、五〇〇〇円送りました。カンパの一部にでもしていただければ幸甚です。次第におかしな世の中になりつつあります。改めて河上肇を考えてみたいと思っております。（熊本市　上妻四郎）

会報をありがとう。残念ですが高令のため欠席させていただきます。なお、先般より同じ住所にて藤田有作宛にて二通届くようになりました。何かの間違いと存じますので、お調べの上、名簿より抹殺下さい。お手数のことと存じ一報いたします。（千葉市　福田有作）

事務局　ご注意ありがとうございました。本号より抹消いたします。

帰郷後、二年有余が経過しました。『全集』刊行を契機に先生の郷土で読書会など始っているに違いないと期待していましたが、小生の視野が狭いのか、未だ眼に映りません。できれば山口にも記念会をと願っています。今度の会報に脇さんのご寄稿を見出し、大きい欣びです。一度お訪ねしたいと思います。ご住所をお知らせいただけませんか。岳父兼光との関係もなお研究中です。（山口県厚狭郡山陽町　細迫朝夫）

事務局より。目下会員仮名簿を勤務先のパソコンに入れさせてもらい整理中です。コンピュータのアウトプットによりますと河上肇記念会会員として仮名簿に登録されている方々は一八名いらっしゃいます。今年二月一一日、山田洸氏の河上肇と現代と題する講演があったと伝えられます。この会報が届くまでには、山口県在住の会員仮名簿に登録されている方々の一覧表をお届けいたしましょう。もちろん、脇英夫様も入っておられます。

昨秋、住所移転いたしました。（東京都日野市　泉　博）

一一、老令会員に

毎回、会報を送っていただきましてありがとう。毎年、会費をお送りするのは困難な状態ですが、会報の一部なりともその中にお送りしたいと思っています。よろしくお願いします。

事務局より　河上肇先生の美しい心を敬慕する会員の集りです。会費はお支払い出来るときにお支払い下さい。

一二、

事務局より

退会したいとおっしゃる方々の、退会の辞を掲載する場所ですが、何でもかでも載せるのは、プライヴァシの侵害ではないかとの会員の声もあり、事務局内にも、退会までは載せなくともの声あり。いずれが正鵠を得た処理であるかは問題ながら、今回は割愛することと致しました。

一三、百年祭のときのこと

『河上肇全集』はずっと購読しております。わたくしも河上博士の著書によって戦時中に科学的世界観、科学的経済学に目覚めた者の一人です。ところで梅田勝が河上博士の墓前で、河上博士を「卑怯者、裏切り者」と罵倒したとのことですが、これは学者、知識人全体を敵にまわし統一戦線を破壊するもので黙過できません。たしかに博士は「獄中独語」を発表して離党されましたが、敗戦直後に党の最高幹部が博士を訪れて入党を乞い、博士はそれに応じられて「同志徳田、志賀に捧ぐ」「同志野坂還る」の名詩を「赤旗」に公表して日本人民を激励しつつ逝かれました。それを今更、何ということでしょうか。会として中央委員会に正式に抗議されてはいかがでしょうか？（東京都文京区　松田弘三）

事務局より

河上肇記念会を代表する正式な見解でありません。会報発送などの雑務を手伝っているボランティアの一人としての意見を書きます。わりこみを許して下さい。似たようなご意見をときどき伺いますので。

入党懇請と入党は『全集』によって河上側から見るかぎり、雰囲気としてはともかく、事実としては、なかったもののように、私は判断しております。

河上肇生誕百年記念祭は七九年で墓前祭は一〇月二一日でした。五年前のことです。聞き違い、記憶ちがいでなければ「挫折したが」という言葉が使われたように思い出されます。『全集』二三巻をひもとくと、次の文に行き当ります。

十月十五日（月）曇、依然寒し。例年より七度位の低温の由。午前中、去る十日志賀、徳田等の諸同志と共に府中刑務所を出でし黒木君来訪。約三十分対談。余は終始弱い態度しか取り得ざりしものにて、諸君に対し面目なしと語りしに、さに非ず、過去の閲歴、年令、体質等より考へて先生はそのベストを尽されしものとして一同は感謝し居れりとのことに、余いたく感激す。（下略）

河上さんの側から見れば「挫折」はかならずしも不当でないにしても、共産党の側から見ればどうでしょうか？

墓前に詣でた人間の一言、一句を取り出して党との関係を云々する

ことの妥当性に、私個人は疑問を感じます。それも私の記憶に誤りがないとしてのことですが……。

風起ちて痩竹鳴り
日暮れて飢烏悲しむ

友人の河田博士が昭和一七年の死の前に〝もち〟を食いたいとおっしゃったが、食糧難のおりとて、それも食べさせてあげられなかった。それからも食糧事情はどんどん悪くなって、昭和一八年痩せ衰えたからだを杖にゆだねて河田博士の墓を訪い、烏鳴くを飢えて悲しむかと思いやる河上さん、もうすでにご自身、栄養失調だったでしょうに。それらをすべて忘れたとして、

風起痩竹鳴
日暮飢烏悲

の詩は、近代的な悽愴のイメージが凝縮されてしびれる。ことに飢烏悲の三字が新しい。始めて見たとき新しく、いまも新しい。くちばしを閉ざした黒烏の赤いのどを見る思いがする。

河上さんの出獄後の作品等を通じて、河上さんに敬愛の念を持たれたり、深められたりした方も多いと感じつつあります。河上さんが出獄後書かれた、なにかに感動した人間は「河上さんは挫折したが」というような言葉を吐き得るとは共感をもって理解すること、到底、私に出来ない。そういう人間を代表として百年祭に参加させたことを、党の名誉のために惜しみます。だが、証拠のはっきりしないことで、争うより、みずみずしい感受性を持った、すてきな若者達に、すばらしい自叙伝を読んでもらうために、河上さんの美しい詩を読んでもらうために、記念会のボランティアの一人として、いましばらく、手伝いをさせていただきたいと思っている。（大久保記）

振替通信より

私の祖父の弟が、河上先生の教え子だった関係で会員になっています。会報一九号の川勝伝氏と宇都宮徳馬氏の講演、感銘を受けました。会報を読んで感じることは、こうした読み易い、判り易い内容のものも時にはよいと思います。河上肇の意義が今後、ますます問われると思います。ご健斗を祈ります。（岐阜県高山市　池之端甚衛）

年会費三〇〇〇円に、気持ですが会の運営資金として一〇〇〇〇円を寄付させていただきます。会報での情報では記念会がますますご盛会の由、お祝い申し上げます。ここ数年、外国の人達との交流の際、日本人の哲学、倫理感の不足を指摘され、学問の水準低下を私自身も感じています。そのような中で記念会の会報で知らされる人達の〝求道〟欲は、大切な事であります。ご発展を期待します。（神奈川県横浜市　佐藤敬治）

私は名和統一先生のゼミナリストですので、河上先生の孫弟子ということになるのでしょうが、大学へ入る前に河上先生の本によって社会問題と経済学に開眼しました。（奈良県生駒郡三郷町　上野　晃）

今までは熱心に拝見しておりましたが、昨年三月手術入院して以来、いまだに入院中にて余り本もよめなくなりました。そんなことで残念ながら退会させていただきます。貴会の発展を祈ります。（岐阜県大垣市　高橋順吉）

私は毎年会費を送っていないような気がします。お知らせいただければご送金申し上げます。私はただ会報だけでつながっている人間ですが、いつまでも読みつづけたいと願っておりますので、今後共、よろしく。二月二〇日（東京都渋谷区　渡辺達也）

今回（一九号）大きな封筒に入ってきて折れ目がなくなり読みやすくなりました。印象として印刷も数段きれいになった気がします。郵送料がかさむでしょうが、今回の形式、継続していただければと思います。（高知市　中谷武雄）

事務局より

会報二一号より、読み易さを目指して（他の面はどうなりますか？）形式を変えるよう話し合っております。多分、細川編集長より、この号に予告が出ると思いますが……。

会員でないので、会費のつもりでなく、雑費として送金します。年一度の総会には参加させて下さい。お寺も橋本先生も好ましく、お詣りさせていただくこと、たのしみですので。（兵庫県神戸市垂水区　曽我まり）

私は講演の中の宇都宮徳馬氏の文に回想と感慨を覚えました。書きたいことは沢山ありますが、水田三喜男君のことだけ書かせてもらいます。水田君は私と同郷で、旧制高校入学前に上海の東亜同文書院の学生でした。そこで法律の先生をしていた私の兄に可愛がられて、私が高校時代、上海の兄のところへ行った時、水田君と一緒に揚子江を重慶まで上った忘れられぬ思い出があります。水田君が同文書院をやめて水戸高校へ行ったのは、私の兄と私の忠告が少しはきいたように思います。（大阪府和泉市　丸島　誠）

昭和一三年四月一六日午後、ミヤコホテルの大ホールで佐々木惣一先生の還暦祝賀会の席で、森戸辰男を遠くで見て、佐々木先生との関係で小生との三角座標において、その後の社会統計学を構想した次第でした。（広島市南区　青盛和雄）

会報が号を追うごとに充実して来て読むのが楽しみです。年二回では間がとぎれて仕舞い淋しく感じます。（山口県防府市　上田　隆）

三月二十九日（月）朝、法然院に故河田博士の墓に詣づ。余の筆に成りし墓石新たに出来たるところなり。字弱くして落ち付き居らず、上出来とは云ひ難く、残念なれども致方なしとも思ふ。（全集一三巻四三七頁）

世話人会議摘要

日　時　八四、一一、一七（土）一三・〇〇～一五・〇〇時
場　所　京都、三高会館
出席者　（敬称略、五〇音順）一海知義、大久保雅摂、大門英太郎、小泉仁一郎、杉原四郎（代表世話人）平井俊彦、細川元雄、

今後の活動

一、講演会、年一回の総会だけでは寂しい。春に講演会を催してはどうか？　講師の候補、東北大での講演、山口での講演、事務局の負担などいろいろの面で検討されたが、結論らしきものに到らず。筍狩りの復活も考えてはどうか？

二、若い会員をどうして増やすか？

(イ)　若い研究者に関心を持つ方々がいるので、入会を勧める。

(ロ)　会報の姿を若い人に馴染み易くする。思い切った紙面の刷新をやったらどうか？　商業主義に流れるのは困る。どんな形とするかは会報編集部で検討する。

(ハ)　東京で河上肇展をやったらどうか？　会場、費用、財政的裏付け等検討。河上全集第二期の終了時をめどに検討する。

（議事メモ紛失し、会の再現不可能に到る。はなはだ申訳なく存じおります。大久保）

編集後記

本誌が皆さんのお手元にとどいた七月上旬の丁度百年前、マルクスの『資本論』第二巻が発刊された。第一巻が刊行されてから十八年目、著者マルクス死後二年目のことである。

『河上肇全集　続3』の「資本論入門（下）」が四月に配本された。河上のこの入門は『資本論』第一巻で終っている。第二巻、第三巻の入門は全く書かれなかったのであろうか。マルクスは尨大な未定稿を残した。河上も講義ノートや多くの抜書きのノートを残している。その中には「貨幣資本の循環行程　第二巻第一篇第一章」と「生産資本及び商品資本の循環行程　第二巻第二篇第二章、第三章」と表記したノートのつづりがあり、幻の第二巻入門ではないかと心をおどらせたが、いずれも抜書きに終っており、他のノートの断片つづりと同じく書かれた年代も不明である。今は河上の『資本論』第二、三巻の入門は、『社会問題研究』の「略解」と『経済学大綱』の当該箇処にあると思わざるをえない。

※　※　※　※

本会の十周年と会報発刊二十号の記念として本号に杉原世話人代表の巻頭言と巻末に本誌の総目次とを載せました。次号は秋の総会案内号です。すでに脇英夫氏の「岩国の河上肇旧宅をたずねて」がありご期待下さい。ただし一篇のみです。本会の記念特集として、次号および年末刊行の次々号を予定しています。本会創立の頃の思い出、出席した総会のこと、会および会報への希望などご投稿下さるようお願いします。（次号締切八月十日、紙幅四百字詰五枚程度、宛先は事務局まで）本号一三ページで書かれたように本誌も装いも新たになり、より一層誌面充実を期し、編集子も頑張りたいと思います。

（細川）

河上肇記念会会報総目録（第一～二〇号）

No. 1　（一九七五年一二月）

会報の創刊に当って（末川博）
「河上肇記念会」由来（小泉仁一郎・大門英太郎）
河上肇記念会総会（小泉民次）
「河上肇文庫」の成立ちについて（植田光雄）
河上肇全集の刊行について（杉原四郎）
河上肇記念会計理報告―中間報告（大門生）、第二十九回目の河上祭（O）、白石凡氏喜寿祝賀会、筍狩の記、私と河上肇文庫（田中栄一）
編集後記（S）

No. 2　（一九七七年一月）

新春に当って（末川博）
昭和五十一年度総会の報告
河上肇の人と学問―総会記念講演要旨（相沢秀一）
歿後三十周年記念連続講演会―第一回講演会の報告
経済理論学会の記念行事について（杉原四郎）
第三〇回京大河上祭の報告（京大河上祭実行委員会）
近大学術祭河上歿後三十周年記念行事の報告（近大二部商経研究会）
京都府立総合資料館の「河上文庫」について（竹林忠男）
法然院墓地ガイド―住谷悦治氏からの聞き書
河上肇歌碑拓本のこと（大久保雅摂）
事務局だより（法然院のこと、恒例・春の筍狩懇親会のこと、記念会これからのこと）、編集後記にかえて（伊藤康彦、大久保雅摂、岡村孝雄、小泉民次、杉山幸雄、持田寿一）

No. 3　（一九七七年五月）

特集・故末川博先生、故福井孝治先生追悼
明暗三つづつを―末川先生を偲び（住谷悦治）
末川博先生を悼む（白石凡）
末川先生を偲んで（川勝伝）
末川先生と河上肇記念会と私（大門英太郎）
末川先生と運転手（安井功）
福井孝治君を悼みて（藤田敬三）
東京河上会と河上肇記念会との統合について（事務局・大門）
第一回講演会講演要旨、第二回講演会報告
「社会問題研究」について―総会記念講演要旨（天野敬太郎）
事務局だより（末川先生逝きて、当会の財政について、「京大学生社会運動史年表」について）、編集後記（S）

No. 4　（一九七七年一〇月二〇日）

特集・各世代の「私と河上肇」
特集にあたって
『貧乏物語』を読んで（伊藤浩美）。鑑三・肇―その見えざる落し穴（松井浩司）。河上肇の経済学思想（深沢明）。私の河上肇観（相坂邦義）。河上肇との出会い（河村敏雄）。姿なき河上肇先生との対面（千葉哲郎）。河上肇に思う（大野春光）。河上肇が教えるもの（市川三次）。妙好人と河上肇先生（小西輝夫）。河上肇『自叙伝』と私（広岡正次）。私と河上肇（和泉とく）。私と河上博士（曽我まり）。河上肇と『自叙

伝』(橋本勲)。河上先生について(伊藤洋)。河上教授室と私(田中真三郎)。河上肇博士と私—恩師を通しての思い出(吉田泰三)。私と河上肇(石井公代)。河上博士の転機となった新労農党解党声明(喜多川栄三)。河上肇先生を崇敬して(稲田秀爾)

第三回講演会講演要旨(杉原四郎「河上肇と『貧乏物語』」)

東京河上会と河上肇記念会との統合問題について(大門英太郎)

事務局だより(当番日記、恒例筍狩懇親会、再び当会の財政などについて、入会のすすめ、主な活動、出版物)、新刊紹介(一海知義著『河上肇詩注』)、編集雑感(T、N、M)、七七年度総会御案内

No.5 (一九七七年一二月二五日)

特集・一九七七年度河上肇記念会総会

特集にあたって。成功に終る七七年度総会。

河上肇の真実を求める心—総会講演要旨(大塚有章)

総会発言「河上肇とのであい」—ファウスト的性格の河上先生(静田均)

人の生きる意味とは(曽我まり)、私は河上肇記念会のセミ会員(田中文蔵)、政男君と綿林小同級生の私(戸田京次)、私の教職への道と河上先生(田中真三郎)、私と河上先生とのつながり(小西輝夫)、河上先生と詩歌(一海知義)、河上先生の学問的態度(住谷悦治)、河上学説の再検討を望む(内海庫一郎)、百年祭実行委員会をつくろう(大門英太郎)、百年祭記念事業に映画を(鈴木春雄)、映画「新たなる旅に立つ人—河上肇」(小島義史)、学ぶ自由さえないいまの京大(山田浩貴)

河上会の財政と会費納入のお願い、第四回講演会の御案内、当番日記(大門英太郎)、編集後記(T・O)

No.6 (一九七八年六月)

特集・第三十二回京大河上祭

第三十二回河上祭趣意書

河上肇記念会より第三十二回京大河上祭に対する御協力方のお願い(世話人代表・住谷悦治)

京大河上祭略年表

嘗ての河上祭の人達より

(1)河上祭のおもいで(内田正志)、(2)河上祭と私(下野克己)、(3)古典としての河上肇(伊藤努)、(4)河上祭思い出すまま(永田量子)。

河上肇への二つの接近(内海庫一郎)

河上肇とその周辺を記録する会・発足、事務局だより、編集後記(O・S)、生誕百年記念事業に関するアンケート(お願い)

No.7 (一九七八年一〇月)

七八年度総会御案内

第三十二回京大河上祭への御援助に対する御礼(世話人代表・住谷悦治)

第三十二回京大河上祭の報告(京大河上祭実行委員会)

河上博士をたたえる詩について(編集部)

生誕百年記念事業に関するアンケートの集計(事務局)

美術館—疎水—法然院への散策の提案(会員投書)

事務局だより(山宣会が山宣虐殺五十周年記念事業を計画、米国で出版された河上研究の本、当番日記)、編集部の繰言、編集後記(N・O)

No.8 (一九七九年二月)

昭和五十三年度総会報告

わが師河上肇先生の思い出(蜷川虎三)

新聞に載った総会出席者の感想
読売新聞―河上肇の生き方を学んでは（田中栄一）、京都民報―法然院の墓地（塩田庄兵衛）
会員諸氏のご意見を問う（河上肇生誕百年記念事業推進キャンペインについて）
河上肇とぼくらの世代（谷本英男）
会員投書（(1)若い人達と河上先生について語ろう、(2)百年祭の運営はオープンに願います）
図書案内、当番日記、編集後記（赤）

No. 9　（一九八一年二月一日）
特集・一九八〇年度河上肇記念会総会
一九八〇年度総会報告
開会の挨拶とお礼を（大門英太郎）
河上肇全集について―講演（杉原四郎）
総会発言「河上肇記念会とのであい」
追悼〝藤井松一氏〟と『貧乏物語』音読会（塩田庄兵衛）、労農党玉砕大会（松本広治）、『燎原』のこと（伊垣次光）、愛―人間への愛が河上を導き（相沢秀一）、病弱のメンバーとして（大橋隆憲）、河上の身内より（羽村二喜男）
河上肇生誕百周年記念論文・記事目録（細川元雄）
河上肇関係記事　一九八〇年(1)（細川元雄）
河上会の財政と会費納入のお願い、図書紹介、当番日記（大門英太郎）
編集後記（O、T・O）

No. 10　（一九八一年一〇月一日）
八一年度総会御案内
ごあいさつ（杉原四郎）
住谷先生に謹んで御礼申し上げます（大門生）
一冊の河上肇旧蔵書―ボルヒアルト『通俗資本論』をめぐって（細川元雄）
河上肇著「貧乏物語」鑑賞(1)（前川文夫）
河上肇情報センター（事務局O）、会員通信、図書紹介（H生）、当番日誌（大久保生）、編集後記（細川）

No. 11　（一九八二年一月一日）
新年のごあいさつ（世話人代表・杉原四郎）
一九八一年度総会特集
開会挨拶―どうぞ弁当を食べながら（大門英太郎）
お土産の由来（大橋隆憲）
ご挨拶―河上の豊かさ～大正四―六年を例として（杉原四郎）
河上先生の光―講演（藤田敬三）
総会発言
河上肇全集発刊のこと（米浜泰英）、労働者研究者の養成によって（池上惇）、さまざまな縁（山下肇）、農民運動家だった父（田辺平）、平和と民主主義を守ること（千田晴之）、核物理学者として娘に代り（池上栄胤）、時代を越えて河上を蘇らすために（三輪三雄）、偉い先生という印象（稲田素臣）、全集第二回配本の校訂から（一海知義）
東京河上会と河上肇記念会（藤原良雄）、お墓参りに（麻生夫妻）、健全な会の運営のために（児玉誠）、閉会の辞（大橋隆憲）。
塔婆立ての寄進、会員通信、河上肇情報センターだより、当番日誌（大久保記）

No.12　（一九八二年一〇月一日）

八二年度総会御案内
相沢秀一先生を悼む（杉原四郎）
第三五・三六回河上祭（宮本公子）
河上肇著「貧乏物語」鑑賞(2)（前川文夫）
図書紹介、当番日誌（大久保記）

No.13　（一九八三年一月一〇日）

一九八二年度総会特集
世話人の代表挨拶（杉原四郎）
河上先生の思い出など―講演（脇村義太郎）
河上肇の転期と詩―講演（一海知義）
王文学先生と交流を（生沼曹喜）
音読会とその産物（塩田庄兵衛）
故稲田秀爾のマイクロ評伝（稲田素臣）
西川勉氏を悼む（細川元雄）
会員通信、当番日誌（大久保）

No.14　（一九八三年五月三〇日）

故大橋隆憲先生追悼
大橋隆憲さんを偲ぶ（大門英太郎）
大橋隆憲についての二、三の思い出（内海庫一郎）
王学文先生からのお礼状
表紙解説・入獄五〇周年、図書紹介、河上文献だより（河上「新しき村」評と現代、古書二冊）、会員通信、当番日誌（大久保）、入会のすすめ、河上肇記念会会則、編集後記

No.15　（一九八三年九月一〇日）

八三年度総会御案内
河上・櫛田共訳『共産党宣言』の草稿（大島清）
河上肇著「貧乏物語」鑑賞(3)・完（前川文夫）
河上文献だより（マルクス死後一〇〇年と河上肇、河上政男遺稿集について）、会員通信、当番日誌（大久保）、編集後記（細川）

No.16　（一九八四年五月一〇日）

一九八三年総会特集
京大白川会の事など（大門英太郎）
河上肇の書簡（講演）（杉原四郎）
会場スピーチ
日記の人名索引（米浜泰英）、核廃絶の会（竹井一雄）、音読会四年目（沖本彰）、学生時代の想い出（増田孝）、河上先生に習って（カニェ邦彦）、河上先生を敬慕して（佐藤克巳）、偶然の出逢い（林辰彦）、お祖父ちゃんの想い出（鈴木洵子）、社会主義研究者として（藤田整）、河上全集と私（安井功）、河上日記編集のことなど（一海知義）
図書紹介、会員通信、当番雑言（大久保）、編集後記（細川）

No.17　（一九八四年七月三〇日）

白石　先生への弔詞（世話人代表　杉原四郎）
橋本峰雄師を悼む（一海知義）
河上肇全集編集室日記（米浜泰英）
河上肇と中国二題―センターだより（細川元雄）
会員の追悼文をお寄せ下さい、研究会員と老令会員の募集、図書紹介、

会員通信、墓参記、当番雑言、編集後記（O）

No. 18　（一九八四年九月一〇日）

一九八四年度総会御案内
大島清先生を悼む（住谷一彦）
大河内一男先生を偲ぶ（大門英太郎）
郷里における河上先生（脇英夫）
会員通信、当番雑言（お）、図書紹介、編集後記（H生）

No. 19　（一九八五年二月一〇日）

一九八四年総会特集Ⅰ
開会にさきだって（大門英太郎）
開会の挨拶（世話人代表　杉原四郎）
河上先生、そして門下生との出会い（講演）（川勝伝）
今日の情勢と軍縮―危機の時代と河上精神（講演）（宇都宮徳馬）
河上肇関係記事（Ⅰ岩国における講演会、Ⅱ山口における展覧会）、
総会出席（予定）者の通信、会員通信、編集後記（細川）

No. 20　（一九八五年六月三十日）

記念会のこれまでとこれから（杉原四郎）
一九八四年総会特集Ⅱ～総会会場スピーチ記録～
安井功氏の死を悼む（大門英太郎）
会員通信、世話人会議事摘要（大久保）、編集後記（細川）
河上肇記念会会報総目録（第一～二〇号）

人名索引

（執筆者名、被追悼者名の五十音順とし、掲載号数を指示した。なおイニシアル、無署名のもの、会員通信欄は除いた）

ア

相坂　邦義　4
天野敬太郎　3

イ

一海　知義　5 11 13 16
池上　惇　17 11
市川　三次　4
伊藤　洋　4
稲田　素臣　11 13
伊垣　次光　9
石井　公代　4
伊藤　努　6
伊藤　康彦　2
岩城　牧　4
相沢　秀一　2 9 12（追悼）
麻生　夫妻　11

ウ

植田　光雄　1
内田　正志　6
宇都宮徳馬　19
内海庫一郎　5 6 14

オ

王　学文　14
大河内一男　18（追悼）
大野　春光　4
沖本　彰　16
生沼　曹喜　13
大島　清　15（追悼）18
大橋　隆憲　9 11 12 14（追悼）
大久保雅摂　2 11 12 13
大塚　有章　14 16 20
大門英太郎　1 3 4 5 9 10 11 14 16 18 19 20

カ

カニエ邦彦　16
川勝　伝　3 19
河村　敏雄　4

キ

喜多川栄三　4
京大河上祭実行委員会　2 7
近大二部商経研究会　2

コ

小泉仁一郎　1
小泉　民次　1 2
小島　義史　5

児玉 誠	11	小西 輝夫	4 5
サ			
佐藤 克己	16		
シ			
塩田庄兵衛	8 9 13	静田 均	5
白石 凡	3 17 （追悼）		
ス			
末川 博	1 2 3 （追悼）	杉原 四郎	1 2 4 9
鈴木 洵子	16	鈴木 春雄	10 11 12 13 16 17 19 20 5
住谷 一彦	18		
セ			
千田 晴之	11		
ソ			
曽我 まり	4 5		
タ			
竹井 一雄	16	竹林 忠男	2
田中 米一	1 8	田中 文蔵	5
谷本 英男	8	田村 浅雄	4
チ			
千葉 哲郎	4		
ト			
戸田 京次	5		
ナ			
永田 量子	6		
ニ			
西川 勉	13（追悼）	蜷川 虎三	8
ハ			
橋本 勲	4	橋本 峰雄	17（追悼）
ヒ			
広岡 正次	4		
フ			
深沢 明	4	福井 孝治	3（追悼）
藤田 整	16	藤原 良雄	11
ホ			
細川 元雄	16 17 20		
9 10 13 15			
マ			
前川 文夫	10 12 15	増田 孝	11
ミ			
松本 広治	9	松井 浩司	4
モ			
宮本 公子	12	三輪 三雄	11
ヤ			
持田 寿一	2		
ヨ			
安井 功	3 16 20（追悼）	山下 肇	11
		山田 浩貴	5
ワ			
吉田 泰三	4	米浜 泰英	11 16 17
脇 英夫	18	脇村義太郎	13

河上肇記念会 入会のすすめ

河上肇記念会は、関西を中心として正式に発足して満十二年になります。毎年秋には河上の墓前に集まり、法然院にて法要を営み、会の総会を開いております。会員の資格は会則にある通り、河上先生に学び、先生を知ろうとする入びとです。是非ご入会をおすすめします。

会員の皆さまには友人、知人にこの会をご紹介下さい。

転居通知のお願い

転居、住居表示変更などのあった場合は、事務局へご一報下さい。

〒五四二一　大阪市南区島之内一丁目一〇番一九（丸善石油ビル）千代田商事株式会社内　河上肇記念会

貧乏物語　初版

河上肇記念会　会則

一、この会は河上肇記念会と称し、大阪市（または京都市）に事務所を置く。

二、この会は、河上肇先生の人格とその業績を讃え、これを広く、かつ永く伝えるための研究ならびに事業を行う。

三、河上肇先生を敬慕し、先生に学び、先生を知ろうとする人びとを会員とし、いかなる資格ならびに政治的立場を問わない。

四、毎年一回総会を京都で開き、その他随時集会および事業を行う。

五、この会の会友および世話人は別の定めによって選び、総会において承認をえる。

世話人代表はこの会を代表し、世話人中の事務局担当が事務を執行する。

六、この会の経費は、会費ならびに寄付金をもってあてる。会費は年額三〇〇〇円とする。

七、この会則の改廃は総会の議決による。

京都（きょう）に〝煙〟あり

1965年　創刊　只今49号

戦前日本プロレタリア文化運動の生き残り10名（72～82才）が出している異色の同人誌、埋れた青春像の発掘を柱に詩・歌・小説・エッセイもあり、各地、各界、各層からの便りを〝声〟欄に収めているのも特色

A5判120頁　頒価500円　〒200円

「煙」　同人社

京都市中京区西ノ京藤ノ木町11の24

児玉　誠方

電話　京都（075）811－7646番

振替　京都　2－15653番